

教育研究業績一覧

氏名 石村 郁夫
学位 博士（心理学）

研究分野	研究内容のキーワード	
健康心理学、臨床心理学	コンパッション・フォーカスト・セラピー、ポジティブ心理学、セルフ・コンパッション	
主要担当授業科目	ポジティブ心理学、社会リテラシー、心理学的支援法（心理療法B）、心理学実験Ⅰ・Ⅱ、心理学文献購読A・B・C・D、発達心理学セミナー	
教育上の実績に関する事項	年月日	概 要
<u>（臨床実践活動）</u>		
1) 中学校における教育相談活動（茨城県牛久市立牛久第三中学校スクールアシスタント）	平成16年4月～平成18年3月	不登校や保健室登校の生徒に対する教育相談活動を中心として、スクールカウンセラーや生徒指導主事との連携、教育相談所との情報交換、要支援の生徒に対する行動観察を行った。
2) 少年院における心理劇の実践活動（茨城農芸学院心理劇補助員）	平成16年4月～平成20年3月	自己表現が苦手な少年、他者理解に乏しい少年、処遇中に対人トラブルを起こす少年に対して、法務教官の監督のもとで心理劇の補助を行った。7名の少年に対して9回のセッションを行う形式で、4年間の活動を通して80人程度の少年を担当した。
3) 心療内科・精神科における心理検査及び心理療法の実践活動（医療法人社団久響会あいクリニック神田非常勤心理士）	平成18年4月～	2008年から現在まで週一回で神田カウンセリングセンター（東京都千代田区内神田3-14-8 ニシザワビル5階）にて心理検査、認知行動療法、自律訓練法などを用いてカウンセリングを行っている。
4) カウンセリングルームにおける心理療法の実践活動（福田カウンセリングルーム非常勤カウンセラー）	平成19年4月～平成25年3月	2007年4月から2013年3月まで毎週土曜に福田カウンセリングルーム（茨城県つくば市要290）にて心理検査、認知行動療法、自律訓練法などを用いてカウンセリングを行った。
5) 精神的健康を向上させる取り組み（筑波大学人間総合科学研究科学学位論文）	平成20年1月～平成20年3月	申請者の学位論文の中で、精神的健康を向上させる取り組みとして、大学生を対象にポジティブな体験を増やす介入を行った。これにより、実験に参加した学生の抑うつや不安感情が低減し、学生のメンタルヘルスが改善された。
6) 保健管理センターにおける学生相談活動（茨城大学保健管理センター非常勤心理士）	平成20年4月～平成21年3月	茨城大学保健管理センターの非常勤心理士として、学生の健康相談を担当した。主に、学業、人間関係、性格の悩みなどの相談活動をした。これにより、担当した学生は自己理解を深め、学生の精神衛生や修学状況が改善された。
7) 東京成徳大学大学院心理・教育相談センターにおける地域支援及び相談活動（心理・教育相談センター所員）	平成21年4月～	東京成徳大学大学院に併設されている心理・教育相談センターに来談される方への相談活動および大学院生のスーパーヴィジョンを行っている。

8)東京成徳大学学生相談室における学生相談活動(東京成徳大学学生相談室相談員)	平成22年4月～	東京成徳大学学生相談室における学生相談をし、精神症状、発達障害、学習上の問題を抱えた学生の学生生活の支援を行っている。
9) 学生カウンセリングルームでの学生相談活動(総合研究大学院大学「メンタルヘルスカウンセラー」)	平成26年4月～	国立情報学研究所の教職員及び総合研究大学院大学の学生に対してメンタルヘルスカウンセラーとしてカウンセリングを実施し、来談者のメンタルヘルスの向上を図っている。
10) 東京都教職員への専門的心理相談活動(一般財団法人 東京都人材支援事業団「専門的心理相談員」)	平成28年4月～	東京都教職員への専門的心理相談を実施し、来談者のメンタルヘルスの向上を図っている。
<u>(教育実践活動)</u>		
1) 心理統計実習(筑波大学第二学群人間学類「心理統計実習」専門科目 2年次配当)	平成18年4月～平成19年3月	筑波大学第二学群人間学類において、心理統計学の学習支援を担当した。主に、関連する講義の復習や心理統計データの計算演習の補助をした。これにより、学生の心理統計学に関する知識と応用力が定着した。
2) 心理学研究法(筑波大学第二学群人間学類「心理学研究法」専門科目 3年次配当)	平成18年4月～平成21年3月	筑波大学第二学群人間学類において、インストラクターとして心理学研究法の実践指導を担当した。主に、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成などの実践指導をした。これにより、学生は一連の心理学研究法を体得し、その実践力を養った。
3) 心の探求(日本大学薬学部「心の探求」専門科目 1年次配当)	平成21年4月～平成25年3月、平成27年9月～平成28年3月	薬学部の学生に対して、一般心理学(実験、学習、発達、社会、臨床心理学など)の基礎知識や理論を紹介し、人の心を探求する姿勢を育成する教材を作成した。さらに、より深い学習を促すために、各トピックに関連する心理テストを含めた。
4) 家族関係論A(東京成徳大学応用心理学部「家族関係論A」選択科目 2年次配当)	平成21年4月～平成26年3月	現代の家族の在り方、夫婦や親子の関係に関して、背景となる社会状況や基礎理論を紹介し、様々なデータや図表を交えて、教材を作成した。さらに、ある家族の事例を通してより深い学習を促すために、視聴覚教材を利用した。
5) カウンセリング特論(東京成徳大学大学院心理学研究科「カウンセリング特論」選択科目 修士1年次配当)	平成21年4月～平成24年3月	カウンセリングの理論や実際を紹介するだけではなく、カウンセリングのプロセスに関する理解を深めるために、討議、グループワーク、ロールプレイを盛り込み、カウンセリングで必要とされる技術に関する実践教材を作成した。
6)心理学基礎実験(東京成徳大学応用心理学部「心理学基礎実験」必修科目 1年次配当)	平成21年4月～	心理学基礎実験として、ミュラー・リヤー、パーソナル・スペース、鏡映描写、無意味記憶、ビデオ観察等を題材にして、研究計画の立案、分析、図表の作成、レポート作成に関する基礎的研究能力を養っている。
7)発達臨床心理学演習(東京成徳大学応用心理学部「発達臨床心理学演習」選択科目 3年次配当)	平成21年4月～	発達臨床心理学に関連する卒業論文や卒業研究を執筆するにあたり、文献検索の方法、研究計画の立案、質問紙作成、データ解析及び分析方法、レポートの作成等の視点から演習科目を担当している。

8)発達臨床心理学演習 (東京成徳大学大学院心理学研究科「発達臨床心理学演習」 選択科目 修士1,2年次配当)	平成21年4月～平成31年3月	発達臨床心理学に関連する修士論文を執筆するにあたり、各自興味のある研究テーマの論文発表や研究計画の立案と実施、データ解析や論文執筆の指導をしている。
9)臨床心理実習 (東京成徳大学大学院心理学研究科「臨床心理実習」 選択科目 修士1,2年次配当)	平成21年4月～平成31年3月	東京成徳大学大学院心理・教育相談センターに来談する事例に関して、複数の教員で、受理会議、事例会議の運営・指導を行って、学生の臨床技術の向上を図っている。
10) 患者のころを知る (日本大学薬学部 「患者のころを知る」 専門科目 2年次配当)	平成21年9月～平成25年3月	薬学部の学生に対して、臨床心理学や心理治療の基礎知識や理論、心理臨床現場の実際を紹介する教材を作成した。
11) 発達臨床心理学B (東京成徳大学応用心理学部 「発達臨床心理学B」 選択科目 2年次配当)	平成21年9月～平成22年3月	子どもの認知発達や社会性の獲得などの基礎知識や子どもの発達課題を概観し、子どもの心理状態を査定する描画法に関する教材を作成した。
12) 「心理Ⅰ」「心理1」 (東京理科大学、前期選択科目 理工学部 (平成25年度、26年度)・薬学部 (平成25年度) 配当)	平成25年4月～平成26年8月	東京理科大学の理工学部・薬学部の前期選択科目で、教養科目の「心理Ⅰ」と「心理1」で非常勤講師を担当し、心理学の概論を担当し、教材を作成した。
13) 発達臨床心理学研究 (東京成徳大学心理学研究科 「発達臨床心理学研究 選択科目 博士1,2,3年次配当」)	平成25年4月～平成31年3月	博士後期課程に在籍する院生のための演習科目であり、博士論文を書くための論文指導を実施している。
14) 臨床心理基礎実習 (東京成徳大学大学院心理学研究科 「臨床心理基礎実習 必修科目 修士1年次配当」)	平成25年9月～平成31年3月	面接の基本となるカウンセリングスキルに関して、討議、グループワーク、ロールプレイを通して、面接で必要とされる技術に関して体験的な理解を深める教材を作成した。
15) 心理学研究法特論 (東京成徳大学大学院心理学研究科 「心理学研究法特論 必修科目 修士1年次配当」)	平成25年9月～平成29年3月	心理学研究法の「実験法」(6時間分)を担当しており、実験法の概説、実験計画の立案、実施及び分析法(2要因混合計画、効果量、分散分析)等を実習形式で行っている。
16) 「心理Ⅱ」「心理2」 (東京理科大学、後期選択科目、理工学部 (平成25年度、26年度)・薬学部 (平成25年度) 配当)	平成25年9月～平成27年3月	東京理科大学の理工学部・薬学部の後期選択科目で、教養科目の「心理Ⅱ」と「心理2」で非常勤講師を担当し、心理学の概論を担当し、教材を作成した。
17) 健康心理学 (筑波大学大学院人間総合科学研究科 「健康心理学」 選択科目 修士1年次配当)	平成26年1月～3月	2014年1月～3月まで筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻開設の集中講義である「健康心理学」で非常勤講師を担当し、からだ、ころ、社会の健康の観点から教材を作成した。
18) ポジティブ心理学 (東京成徳大学応用心理学部 「ポジティブ心理学 選択科目 2年次配当」)	平成27年9月～	ポジティブ心理学の基礎理論、研究成果、アセスメント、介入法に関して視聴覚教材や心理テストを用いて講義をし、ホームワークを課して、体験的な学習を図っている。

19)心理学研究法演習（東京成徳大学大学院心理学研究科「心理学研究法演習 選択科目 修士1年次配当」	平成28年4月～平成31年3月	修士2年次になる前に、研究計画の立案や実施、データ解析、論文執筆に関して体験的に学習することを意図し、演習形式で授業を担当している。
20)基礎演習Ⅰ（東京成徳大学応用心理学部「基礎演習Ⅰ 必修科目 1年次配当」	平成29年4月～8月	大学の初年次教育の導入として、大学における学び方、ノートテイキング、目標の設定、施設見学、研究室訪問等を実施した。
21)基礎演習Ⅱ（東京成徳大学応用心理学部「基礎演習Ⅱ 必修科目 1年次配当」	平成29年9月～平成30年2月	臨床心理学の導入部分として、精神症状を呈したことの当事者や臨床現場で活躍している心理士をお呼びし、実際のお話しを伺った。
22)社会リテラシー（東京成徳大学応用心理学部「社会リテラシー 必修科目 2年次配当」	平成30年4月～	社会で活躍している社長や先輩方を招き、人生と仕事観をお聞きし、実際のライフプランニングをし、学生のキャリア形成意識を高める授業を展開した。
23) カウンセリング演習（東京成徳大学心理学研究科「カウンセリング 選択科目 博士 1,2,3年次配当」	平成29年4月～平成31年3月	博士後期課程に在籍する院生のための演習科目であり、博士論文を書くための論文指導を実施している。
24)心理実習事前指導（東京成徳大学心理学研究科「臨床心理実習事前指導 選択科目 修士1年次配当」	平成30年9月～平成31年3月	修士2年次より臨床心理実習に出るための事前の指導であり、面接場面での録画を通して面接技術を高めるための指導を行った。
25) コミュニケーションの心理学（東京成徳大学応用心理学部「コミュニケーションの心理学 選択科目 3年次配当」	平成31年4月～	コミュニケーションの各構成要素からの視点、臨床上のコミュニケーション障害からの視点、コミュニケーションの各場面における視点から検討し、コミュニケーションの理論や技術に対して理解を深める体験的な学習を図っている。
26) 心理学文献購読A①(和文)（東京成徳大学応用心理学部「心理学文献購読A①(英文) 選択科目 2年次配当」	平成31年4月～	日本語の心理学論文を講読することを通して、論文を読むスキル、特に論理の展開、図表の読み取り方、レジユメのまとめ方等のスキルを高める指導を行っている。
27) 心理学文献購読A①(英文)（東京成徳大学応用心理学部「心理学文献購読A①(英文) 選択科目 2年次配当」	平成31年4月～	英語の心理学のテキストを講読することを通して、英文法や英文の構造、心理学の英単語に慣れて、英語の文献を読むスキルを高める指導を行っている。
<u>(学内における委員会等活動)</u>		
1) 臨床心理学科クラス担任	平成21年4月～	クラス担任として、クラス運営を担当し、学生生活に関する全般的な相談を受けて、円滑な学生生活への支援を行っている。
2) 学生委員会委員	平成21年4月～平成22年3月まで	奨学金、サークル、学園祭、その他、学生間のトラブルや学生指導に関する事項について教員間で討議をし、円滑な学生生活を送れるよう支援している。
3) ホームページ運営委員会委員	平成21年4月～	大学のホームページの運営、予算の検討、使用ルールの制定、

	月～平成 23 年 3 月、平成 27 年 4 月～	記事の投稿等を担当している。
4) 教職課程委員会委員(教職課程委員会副委員長 平成 23 年 4 月～平成 25 年 3 月まで)	平成 21 年 4 月～	教職オリエンテーション、介護等体験、教育実習校への訪問、教育実習生の事前と事後の実習指導を担当している。
5) 自己評価報告書編集委員会編集委員	平成 21 年 4 月～	大学の自己評価報告書を作成するにあたって、臨床心理学科及び心理学研究科に関する教育理念や教育実績等の文章を執筆した。
6) 心理・福祉相談室運営委員会相談員	平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月	東京成徳大学に併設されている心理・福祉相談室に来談する事例を担当した。
7) 学生相談室相談員	平成 22 年 4 月～	東京成徳大学の学生を対象に、学生相談室相談員として学生生活の支援のためにカウンセリングを行っている。
8) 研究倫理委員会副委員長	平成 22 年 4 月～平成 31 年 3 月	東京成徳大学研究倫理委員会副委員長として、研究倫理の視点から、申請者の研究計画に関して問題が見られないかチェックし、審議している。
9) 広報及び入試対策委員会委員／同副委員長(平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月まで)／同センター次長(平成 27 年 4 月～平成 31 年 3 月)	平成 22 年 4 月～	オープンキャンパス、高校訪問、入試関連業務や広報業務を運営するための審議事項を検討し、志願者の増加を図っている。
10) 大学院改善委員会学生生活部門委員	平成 25 年 4 月～平成 31 年 3 月	大学院の学生生活に関するアンケートの実施や、学生生活全般に関する悩みに関して担当し、問題が生じた際には学生に聞き取りを行った。
11) 大学院「臨床心理学研究」紀要委員長	平成 26 年 4 月～平成 31 年 3 月	東京成徳大学大学院で発刊している研究紀要「臨床心理学研究」の紀要委員長として、編集委員会を開催して、審査を行って、出版会社との連絡や編集に関わる全ての業務を担当している。
<u>(教育実績に関する大学等の評価)</u>		
1) 平成 21 年度学生による授業評価(前期)	平成 21 年 9 月	学生による授業評価アンケートで大学院生 17 名対象のカウンセリング特論および学部生 82 名対象の家族関係論 A について高い評価を得た。
2) 平成 21 年度学生による授業評価(通年)	平成 22 年 3 月	学生による授業評価アンケートで学部生 1 年次対象の心理学基礎実験について高い評価を得た。
3) 平成 23 年度学生による授業評価(通年)	平成 24 年 3 月	学生による授業評価アンケートで学部生 1 年次対象の心理学基礎実験について高い評価を得た。
4) 平成 25 年度学生による授業評価	平成 26 年 3 月	学生による授業評価アンケートで学部生 1 年次対象の心理学基礎実験について高い評価を得た。

(通年)		
5)平成 27 年度学生による授業評価 (通年)	平成 28 年 3 月	学生による授業評価アンケートで学部生 1 年次対象の心理学基礎実験について高い評価を得た。
6)平成 29 年度学生による授業評価 (通年)	平成 30 年 3 月	学生による授業評価アンケートで学部生 1 年次対象の基礎演習Ⅱについて高い評価を得た。
7)平成 30 年度学生による授業評価 (通年)	平成 31 年 3 月	学生による授業評価アンケートで学部生 2 年次対象の社会リテラシー、修士 1 年次対象の臨床心理面接特論について高い評価を得た。
<u>(社会貢献活動)</u>		
1) 第 10 回 NEC C&C イノベーション研究所主催まほろばセミナー講師	平成 19 年 7 月	NEC C&C イノベーション研究所が主催する第 10 回まほろばセミナーの講師として、研究活動の紹介と交流を行った。
2) 第 1 回世界ポジティブ心理学会議報告会	平成 21 年 9 月	社団法人ポジティブイノベーションセンターが主催する第 1 回世界ポジティブ心理学会議報告会の講師として、研究活動の紹介と交流を行った。
3) 平成 21 年度「東京成徳大学八千代キャンパス公開講座」	平成 21 年 10 月	八千代市の地域住民に対して、「こころとからだ」をテーマに公開講座の講師として、研究活動の紹介と交流を行った。
4) けいはんな情報通信研究フェア 2009 (NEC まほろばワークショップ) 講師	平成 21 年 11 月	けいはんな情報通信研究フェア 2009 における NEC 関西研究所が主催するまほろばワークショップで「知的創造性を語る」をテーマにパネリストとして、研究活動の紹介と討議を行った。
5) 平成 21 年度「千葉県立千葉北高等学校 2 学年進路ガイダンス」	平成 21 年 12 月	平成 21 年度千葉県立千葉北高等学校が主催する 2 学年進路ガイダンスにおいて「自分の性格を知ろう」というタイトルで交流分析を解説し、エゴグラムの体験授業を行った。
6) 平成 21 年度「千葉県立市川北高等学校 2 学年体験型進路ガイダンス」	平成 22 年 1 月	平成 21 年度千葉県立市川北高等学校が主催する 2 学年体験型進路ガイダンスにおいて「リラックスの方法を知ろう」というタイトルで体験授業を行った。
7) 平成 21 年度「東京都立小岩高等学校大学系統別模擬講義」	平成 22 年 3 月	平成 21 年度東京都立小岩高等学校が主催する大学系統別模擬講義において「物事の見方が変わることを体験しよう」というタイトルで体験授業を行った。
8) 習志野市菊田公民館「青年楽講座」講師	平成 22 年 6 月	習志野市菊田公民館で開催された青年楽講座において、コミュニケーション能力の向上を目的としたグループワークを実施した。
9) ポジティブ心理学応用研究会講師	平成 22 年 9 月	社団法人ポジティブイノベーションセンターが主催するポジティブ心理学応用研究会の講師として、研究活動の紹介と交流を行った。
10) 平成 22 年度「千葉県立船橋高等学校	平成 22 年 10 月	平成 22 年度千葉県立船橋高等学校が主催する系統別出前授業において「こころの深さを感じてみよう」というタイトルで体

等学校出前授業」		験授業を行った。
11)NHK 総合テレビ「あさいち」で研究紹介	平成 22 年 11 月	NHK 総合テレビで 11 月 1 日 (月) の「あさいち」で日本ヒューマン・ケア心理学会で発表した「ほめ日記」について研究が紹介された。
12) 平成 22 年度「東京成徳大学八千代キャンパス公開講座」	平成 22 年 11 月	八千代市の地域住民に対して、「こころとからだ」をテーマに公開講座の講師として、研究活動の紹介と交流を行った。
13) 平成 23 年度「千葉県教育研究会 教育相談部会」講師	平成 23 年 6 月	千葉県教育会館にて千葉県教育研究会教育相談部会に所属する小中学校教諭に対して「やる気を育てる心理学」というタイトルで講演を行った。
14)平成 23 年度「東京成徳大学八千代キャンパス公開講座」	平成 23 年 11 月	八千代市の地域住民に対して、「からだの疲れをほぐそうーリラックスする方法を体験的に学習するー」をテーマに公開講座の講師として、研究活動の紹介と交流を行った。
15)平成 24 年度「東京成徳大学併設東京校対象体験授業」講師	平成 24 年 6 月	東京成徳大学併設東京校の 118 名を対象に「あなたの社会脳のタイプを知ろう」というタイトルで心理学への関心を高める体験授業を行った。
16)ポジティブ心理学応用研究会講師	平成 24 年 9 月	社団法人ポジティブイノベーションセンターが主催するポジティブ心理学応用研究会の講師として、研究活動の紹介と交流を行った。
17)平成 24 年度「東京成徳大学八千代キャンパス公開講座」	平成 24 年 11 月	八千代市の地域住民に対して、「噛むことを科学的に理解するー噛むと脳が若返るって本当! ?ー」をテーマに公開講座の講師として、研究活動の紹介と交流を行った。
18)NHK 総合テレビ「うわさくんとカガクちゃん」で研究紹介	平成 25 年 1 月	平成 25 年 1 月 3 日 (木) の午後 6 時 5 分から NHK 総合テレビの「うわさくんとカガクちゃん」の番組の中でフロー体験に関する研究を紹介し、東京成徳大学の知名度向上を図った
19)ポジティブ心理学応用研究会講師	平成 27 年 5 月	社団法人ポジティブイノベーションセンターが主催するポジティブ心理学応用研究会の講師として、研究活動の紹介と交流を行った。
(その他の活動)		
1) 東京成徳大学おにいさんおねえさんこども電話相談の補助	平成 21 年 4 月～現在	東京成徳大学の学生が八千代市の子どもに電話相談を受けており、その学生の監督指導を行っている。
2) 東京成徳大学ポジティブ臨床心理学研究会の運営	平成 21 年 11 月～現在	ポジティブ心理学の応用に関する最新の文献を紹介する研究会を年間 6 回行っており、その研究会の連絡、運営、ホームページの更新などを担当している。
3) 株式会社プロコーチジャパン (Procoach Japan Inc.) の研究補助	平成 22 年 11 月～現在	株式会社プロコーチジャパン (Procoach Japan Inc.) の研究補助などを行っている。
4)卒業論文・卒業研究の論文指導	平成 21 年 4 月～現在	2009 年～2019 年に卒論生 16 名、卒研生 63 名の指導を行った。

5)修士論文の論文指導	平成21年4月～平成31年3月	2009年～2019年に修論生30名の論文指導を行った。また、28名の担当ケースのスーパーバイザーとして臨床指導を行った。
6)博士論文の論文指導	平成25年4月～平成31年3月	2014年、2016年、2018年に1名ずつ博士後期課程の院生を受け入れ、2017年に1名、2020年に1名、博士(心理学)の学位取得者を輩出した。
7) コンパッション・フォーカスト・セラピー研究会の運営	平成28年1月～	コンパッション・フォーカスト・セラピー研究会の世話人として研究会の設立に関わり、研究会の運営をしている。
8)特別研究員・博士特別研究員(PD)の研究指導	平成28年4月～平成31年3月	2016年4月より、特別研究員1名、日本学術振興会博士特別研究員(PD)1名を受け入れて、研究指導にあたった。
9)東京成徳大学発ベンチャー企業プラスワンラボ合同会社の設立	平成29年1月～	東京成徳大学の学内ベンチャー規程の承認を得て、教育・研修業務を中心とする、プラスワンラボ合同会社を設立し、代表社員として兼務している。
職務上の実績に関する事項	年月日	概要
<u>(資格、免許)</u>		
1) 実用英語技能検定準1級	平成15年8月	文部科学省認定
2) 中学校教諭一種免許状(英語)	平成16年9月	茨城県教育委員会 平成十六中一第〇〇六五号
3) 高等学校教諭一種免許状(英語)	平成16年9月	茨城県教育委員会 平成十六高一第〇〇九七号
4) 臨床心理士	平成20年4月	財団法人日本臨床心理士資格認定協会 第18144号
5) 専門健康心理士	平成26年12月	一般社団法人日本健康心理学会 第1907号
6) 精神保健福祉士実習演習担当教員資格	平成28年9月	一般社団法人日本精神保健福祉士養成校協会
6) 公認心理師	平成31年2月	文部科学省・厚生労働省認定 第3685号
<u>(特許等)</u>		
1) 職務発明の認定及び特許の申請	平成20年2月	本発明では、携帯電話のメールを活用し、取り組んでいる活動の進行状況やその時の心理状態を即座に可視化することを考案した。平成20年2月14日に筑波大学知的財産委員会から「フロー体験支援装置、フロー体験支援方法およびフロー体験支援用プログラム」が職務発明であると認定され(筑大産知的第2007215号)、それを受けて平成20年2月29日に特許の申請を行った(特願2008-051269)。
<u>(実務経験を有する者についての)</u>		

特記事項)		
1) 産学連携の共同研究の補助	平成 20 年 10 月～平成 23 年 3 月	日本電気株式会社と産学連携で「フロー体験計測に関する研究」を共同研究で実施しており、研究協力者として、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成などを行った。
2) 科学研究費補助金（若手研究 B：フロー体験を促進させる活力資源育成プログラムの開発）の交付	平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月	科学研究費補助金（若手研究 B）の交付を受けて、日常生活におけるフロー体験を促進させる健康増進プログラムを開発し、無気力や抑うつへの予防効果の実証を目指して、研究代表者として、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成などを行った。
3) 科学研究費補助金（基盤研究 B：ポジティブ心理学モデルによる人間力育成のための心理教育的介入法の開発）の交付	平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月	科学研究費補助金（基盤研究 B）の交付を受けて、ポジティブ心理学モデルあるいは健康生成アプローチによる人間力育成を実現し、肯定的心理資源を有効に機能させるためのポジティブ心理学的介入法の開発を目指して、研究補助者として、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成などを行った。
4) 平成 22 年度東京成徳大学学内プロジェクト「本学園・学生の睡眠行動の研究」の研究補助	平成 22 年 4 月～平成 24 年 3 月	平成 22 年度東京成徳大学学内プロジェクト「本学園・学生の睡眠行動の研究」の研究協力者として、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成を行った。
5) 平成 22 年度東京成徳大学学内プロジェクト「大学生の社会性の向上に関する研究」の研究補助	平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月	平成 22 年度東京成徳大学学内プロジェクト「大学生の社会性の向上に関する研究」の研究協力者として、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成を行った。
6) 科学研究費補助金（基盤研究 C：自己への思いやりの態度を育成強化させる心理教育的介入法の開発）の交付	平成 24 年 4 月～平成 27 年 3 月	科学研究費補助金（基盤研究 C）の交付を受けて、自己への思いやりの態度を育成強化させる心理教育的介入法の開発を目指している。研究補助者として、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成などを行った。
7) 科学研究費補助金（若手研究 B：強みの発見と活用を支援するポジティブ心理学的介入法の開発）の交付	平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月	科学研究費補助金（若手研究 B）の交付を受けて「強みの発見と活用を支援するポジティブ心理学的介入法の開発」を目指している。研究代表者として、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成などを行っている。
8) 研究成果公開促進費（学術図書：フロー体験の促進要因と肯定的機能に関する心理学的研究）の交付	平成 25 年 4 月	研究成果公開促進費（学術図書）の交付を受けて株式会社風間書房から、平成 26 年 2 月に「フロー体験の促進要因と肯定的機能に関する心理学的研究」を出版した。
9) 科学研究費補助金（基盤研究 B：オンラインツールを用いた肯定的心理資源育成と抑うつ予防プログラムの開発）の交付	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	科学研究費補助金（基盤研究 B）の交付を受けて、ポジティブ心理学の理論や技術を応用し、オンラインツールを用いて肯定的心理資源を育成するためのプログラムの開発を目指し、研究分担者として、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成などを行っている。

10) 科学研究費補助金(基盤研究 B: コンパッションフォーカストセラピーの治療マニュアルの作成と効果の検証) の交付	平成 28 年 4 月～平成 31 年 3 月	科学研究費補助金(基盤研究 B) の交付を受けて、コンパッション・フォーカスト・セラピーの治療マニュアルを作成し、その効果の検証を目指して、研究代表者として、研究計画の立案、調査材料の作成、調査の実施、調査データの処理、研究論文の作成などを行っている。
<u>(学会における活動実績)</u>		
1) 感情心理学研究の論文審査	平成 22 年 4 月	日本感情心理学会が編集する感情心理学研究の編集にあたり、論文審査を担当した。
2) 健康心理学研究の論文審査	平成 25 年 12 月	日本健康心理学会が編集する健康心理学研究の編集にあたり、論文審査を担当した。
3) 心理学研究及び Japanese Psychological Research の論文審査	平成 26 年 12 月	日本心理学会が編集する心理学研究及び Japanese Psychological Research の論文審査を担当した。
4) ヒューマン・ケア研究の論文審査	平成 28 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会が編集するヒューマン・ケア研究の編集にあたり、論文審査を担当した。
<u>(学会における受賞歴)</u>		
1) 第 3 回アジア健康心理学会議で Outstanding Presentation Award 受賞	平成 19 年 9 月	本発表は関連領域において先駆的な実証研究として評価され、極めて優秀な発表として表彰された。
2) 平成 20 年度筑波大学人間総合科学研究科長賞受賞	平成 21 年 3 月	筆者が提出した博士論文が先駆的な実証研究として学術的に高く評価され、最優秀論文として表彰された。
3) 平成 22 年度日本心理学会優秀論文賞受賞	平成 22 年 9 月	筆者が日本心理学会に投稿した 2009 年度の原著論文の中で優秀な実証研究として学術的に高く評価され、優秀論文として表彰された。
4) 2011 年国際心理療法会議で Best Poster Award 受賞	平成 23 年 8 月	2011 年 8 月にオーストラリアシドニーで開催された World Congress for Psychotherapy 2011 で発表した内容が学術的に高く評価され、優秀発表として表彰された。
5) 平成 24 年日本ヒューマン・ケア心理学会第 14 回大会ポスター発表部門優秀発表賞	平成 24 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会第 14 回大会で「自己への思いやりの態度育成がうつ症状を軽減する効果に関する研究」の発表を行い、ポスター発表部門で優秀発表賞を受賞した。
6) 平成 25 年日本ヒューマン・ケア心理学会第 15 回大会ポスター発表部門優秀発表賞	平成 25 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会第 15 回大会で「他者に対する尊敬を高める介入法が攻撃性を低減させる効果の検討」の発表を行い、ポスター発表部門で優秀発表賞を受賞した。
7) 平成 26 年日本ヒューマン・ケア心理学会第 16 回大会ポスター発表部門優秀発表賞	平成 26 年 9 月	日本ヒューマン・ケア心理学会第 16 回大会で「弱みに寛容になるプログラム効果の検討」の発表を行い、ポスター発表部門で優秀発表賞を受賞した。
8) 平成 27 年日本ヒューマン・ケア心理学会第 17 回大会口頭発表部門優秀発表賞	平成 27 年 9 月	日本ヒューマン・ケア心理学会第 17 回大会で「慢性疼痛患者における家族からの情緒的サポートと痛みに対する意味づけとの関連」の発表を行い、口頭発表部門で優秀発表賞を受賞した。

9) 平成 28 年日本学校メンタルヘルス学会第 19 回大会ポスター発表学会賞	平成 28 年 1 月	日本学校メンタルヘルス学会第 19 回大会で「過去のいじめによる心的外傷体験がもたらす認知変容に関する調査」の発表を行い、ポスター発表で学会賞を受賞した。
10) 平成 30 年日本ヒューマン・ケア心理学会第 20 回大会優秀発表賞	平成 30 年 6 月	日本ヒューマン・ケア心理学会第 20 回大会で、指導院生・阪無勇士氏の共著者として「一時保護所職員の受容的な関わりを促進するプロセスの検証～施設内体験や保護所への愛着がバーンアウトを介して及ぼす影響～」の発表を行い、学会賞を受賞した。

著書・学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1) カウンセリングのすべてがわかる—カウンセラーが答える本当の心理学	共著	平成 22 年 12 月	技術評論社	監修：國分康孝・新井邦二郎、編著：石村郁夫、羽鳥健司、浅野憲一 一般読者層に対して、カウンセリングの実際、方法、内容、領域に加えて、カウンセラーの職種、カウンセリングの今後の展望について分かりやすくまとめている。
2) 生きる力を育てる臨床心理学	共著	平成 25 年 2 月	保育出版社	編集者：小林芳郎、3 章 1 節の「欲求の意味と種類」の担当執筆者：石村郁夫 欲求の意味と種類に関して、欲求に類似する概念の整理を行って一次的欲求と二次的欲求の種類とその機能を概説した。
3) フロー体験の促進要因と肯定的機能に関する心理学的研究	単著	平成 26 年 2 月	風間書房	単著：石村郁夫 フロー体験の促進要因とその肯定的機能に関する 304 頁にわたる学位論文を研究成果公開促進費（学術図書）の助成を受けて出版した。
4) セルフ・コンパッション—あるがままの自分を受け入れる	共訳	平成 26 年 11 月	金剛出版	共訳：石村郁夫・榎村正美 Neff, K.による“Self-compassion : Stop Beating Yourself Up and Leave Insecurity Behind”を翻訳した。
5) 実践セルフ・コンパッション—自分を追いつめず自信を築き上げる方法	共訳	平成 28 年 8 月	誠信書房	共訳：石村郁夫・野村俊明 コンパッションネイトマインド財団センター長である Welford, M.による“Using compassion focused therapy to end self-criticism and build self-confidence”を翻訳した。
6) クリエイティビティ	共訳	平成 28 年	世界思想社	監訳：浅川希洋志、共訳：須藤祐二、

<p>フロー体験と創造性の心理学</p> <p>7) トラウマへのセルフ・コンパッション</p>	共訳	10月 平成30年10月	金剛出版	<p>石村郁夫 クオリティオブライフリサーチセンター長であり、ポジティブ心理学の経緯である Csikszentmihalyi, M. による “Creativity” を翻訳した。</p> <p>共訳：石村郁夫・野村俊明 Deborah Lee による “The Compassionate-Mind Guide to Recovering from Trauma and PTSD: Using Compassion-Focused Therapy to Overcome Flashbacks, Shame, Guilt, and Fear.” を翻訳した。</p>
<p>(学位論文)</p> <p>1) 日常生活におけるフロー感覚の様態と心理的ウェルビーイングの関係</p> <p>2) フロー体験を促進させる心理社会的要因に関する研究—肯定的心理資源に及ぼす影響を中心に—</p> <p>3) フロー体験の促進要因とその肯定的機能に関する心理学的研究</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>平成16年3月</p> <p>平成18年3月</p> <p>平成21年3月</p>	<p>平成15年度筑波大学第二学群人間学類卒業論文、学士(心理学)</p> <p>平成17年度筑波大学人間総合科学研究科修士論文、修士(心理学)</p> <p>平成20年度筑波大学人間総合科学研究科博士論文、博士(心理学)</p>	<p>日常生活におけるフロー体験の特徴を探索的に抽出し、因子構造の検討を行った。さらに、相関分析によって日常生活におけるフロー体験の頻度が単なる快楽ではなく、意味づけの程度と関連することが示された。</p> <p>日常生活におけるフロー体験を測定する尺度を開発した。さらに、フロー体験を促進させる個人内要因や環境条件を検討し、フロー体験が単なる快楽ではなく、ポジティブな心理資源を構築させることに影響を及ぼしていることが示された。</p> <p>学位論文では、フロー体験を促進させる個人内要因として、目標指向性や時間管理能力、困難状況における肯定的解釈と積極的対処が挙げられることを示した。さらに、フロー体験が自分らしさや性格の長所を育てるなど自己形成を促進させる肯定的な効果を有することを実証的に検討した。また、フロー体験を促進させる心理教育を実施し、抑うつや不安を低減させるなどの予防効果があることを検証した。</p>
<p>(学術論文・審査有り)</p> <p>1) Dimensions of flow experience in Japanese college students: Relation between flow experience and mental health.</p> <p>2) Flow experiences in</p>	<p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成18年3月</p> <p>平成21年3月</p>	<p>Japanese Health Psychology, 13, 23-34.</p> <p>Japanese</p>	<p>共著：Ishimura, I., Kodama, M. 日常生活におけるフロー体験の特徴を探索的に抽出し、因子分析を行った。さらに、相関分析によって日常生活におけるフロー体験の頻度が精神的健康と関連することが示された。</p> <p>共著：Ishimura, I., Kodama, M.</p>

everyday activities of Japanese college students: Autotelic people and time management.		月	psychological Research, 51, 47-54.	日常生活の数多くの場面で目の前のことに没入するタイプの大学生は目標指向性が高く、さらに、時間管理能力に優れていることが示された。
3) Web 質問紙とセンサーデータに基づくオフィスワーカーの心理状態と活動状態の相関分析	共著	平成 22 年 3 月	信学技報, 109, 25-30.	共著: 神谷祐樹、河合英紀、石村郁夫、小玉正博、國枝和雄、山田敬嗣 オフィスにおける従業員の心理状態と活動状態の相関分析の結果、質問紙で回答した内容とオフィスに設置されたセンサーデータから取得した活動内容（コミュニケーション、PC 操作、滞在場所）との間には、中程度の有意な相関が見られ、その時の心理状態の表れ方には個人差があることが示された。
4) わりきり志向と感情体験、精神的健康の関連の検討	共著	平成 25 年 2 月	ヒューマン・ケア研究, 13, 101-110.	共著: 浅野憲一、羽鳥健司、樫村正美、石村郁夫 大学生および専門学校生 139 名を対象にして質問紙調査を行った結果、わりきり志向の有効性認知は豊かな感情体験を増加させ、精神的健康を促進する可能性が示される一方で、対処の限界性認知は不快感情を十分に体験させないために抑うつ・不安傾向を高めることが示された。
5) 対人ストレス経験から獲得した利益の筆記が精神的健康に及ぼす効果	共著	平成 25 年 6 月	心理学研究, 84, 154-159.	共著: 羽鳥健司、石村郁夫、樫村正美、浅野憲一 対人関係におけるストレス出来事のポジティブな側面（利益）を 20 分間筆記する介入を 74 名に実施した結果、敵意の減少と主観的幸福感の増加という点で他の介入法と比べて有意に効果が見られた。
6) Psychological benefits of the flow experience in Japanese college students: Emotions and self-development in autotelic people.	共著	平成 25 年 11 月	Proceedings of the Global Symposium on Social Sciences 2013, 4, 462-470.	共著: <u>Ishimura, I.</u> 、Kodama, M. 縦断研究により日常的にフロー体験を多く報告する自己目的的パーソナリティは Time1 で肯定的感情をより頻繁に感じ、Time2 の自尊感情や本来感等のポジティブな自己概念を高く感じていることが示された。
7) Passion among Japanese college students: Development of the Japanese version of the passion scale.	共著	平成 25 年 11 月	Proceedings of the Global Symposium on Social Sciences 2013, 4, 471-480.	共著: Hatori, K., <u>Ishimura, I.</u> , Ichimura, S., & Koganei, K. 日本人大学生を対象に日本語版情熱尺度の信頼性および妥当性を検証し、調和的情熱および強迫的情熱の二

8) Development of an intervention program to promote strengths use for others,	共著	平成 26 年 2 月	Proceedings of the 3rd Annual International Conference on Cognitive and Behavioral Psychology (CBP 2014), 23-29.	因子が得られ、前者は肯定的感情、後者は恥感情や不安と関連が見られることが示された。 共著：Komazawa, A., <u>Ishimura, I.</u> 強みを他者のために活用するプログラムの効果を実証したところ、抑うつを軽減させ、人生満足感や心理的 well-being が高まることが示された。
9) Effective self-compassionate task for enhancing mental health in Japanese college students.	共著	平成 26 年 2 月	Proceedings of the 3rd Annual International Conference on Cognitive and Behavioral Psychology (CBP 2014), 48-55.	共著：Ishimura, I., Yamaguchi, M., Nomura, T., & Sukigara, N. セルフ・コンパッションを高める自己肯定課題を 4 週間にわたり実施した 2 つの研究から、感情面では抑鬱・不安感情を軽減させ、リラックスし、認知面では反芻が軽減され、問題解決思考になり、自己概念や対人場面ではありのままの自己でいられるようになることが示された。
10) 一医療施設における学生の精神科受診動向に関する調査研究	共著	平成 26 年 9 月	日本医科大学基礎科学紀要, 43, 73-85.	共著：櫻村正美、 <u>石村郁夫</u> 、竹下遥、大江悠樹、野村俊明、西松能子 一医療施設における学生の精神科受診動向に関して同世代の患者と比べた結果、顕著な差が見られなかったものの、治療においてカウンセリングの利用や学内相談施設との連携が重要であることが示された。
11) Construction of a new strengths identification scale.	共著	平成 26 年 10 月	GSTF Journal of Psychology, 1, 61-67.	共著：Komazawa, A., <u>Ishimura, I.</u> 従来の強み尺度を概観し、我が国での利用できる 60 側面から強みを測定する尺度を開発し、信頼性および妥当性の検証を行った。本邦においては対人関係で発揮される強みが高得点を示した。
12) The functional role of resignation orientation on goal engagement, self-esteem, life satisfaction, and depression	共著	平成 26 年 11 月	Health Psychology Research 2014; volume 2:1882, 88-91.	共著：Asano, K., <u>Ishimura, I.</u> , & Kodama, M. 対処的な諦めは代替的な目標の再設定化に影響を及ぼし、消極的な諦めは達成困難な目標から撤退することに関連が見られた。
13) 対人場面における強	共著	平成 26 年	ヒューマン・ケア研究,	共著：駒沢あさみ、 <u>石村郁夫</u>

みの活用行動とその意識構造の検討		12月	15, 10-21.	対人場面において強みを活かすことで得られる充実感や意味づけが強みの他者利用への促進要因となり、向社会的行動の類似概念とも強みの他者利用は関連することが示された。
14) Cognitive Behavioral Therapy as the Basis for Preventive Intervention in a Sleep Health Program: A Quasi-Experimental Study of E-Mail Newsletters to College Students	共著	平成27年1月	Open Journal of Medical Psychology, 4, 9-16.	共著: Asano, K., <u>Ishimura, I.</u> , Abe, H., Nakazato, M., Nakagawa, A., Shimizu, E. 認知行動療法で有効性が示されている睡眠衛生教育を電子メールを利用して大学生を対象に介入したところ、睡眠の質が改善され、精神的健康を高めることが示された。
15) 自己への思いやりを育成・強化するCFTプログラムの試行	共著	平成27年12月	日本医科大学基礎科学紀要, 44, 61-77.	共著: 鋤柄のぞみ, <u>石村郁夫</u> , 小金井希容子, 山口正寛, 野村俊明 臨床心理学を専門とする大学院生1名にCFTプログラムの草案(8セッション)を実施した結果、コンパッション概念の難しさ、自己概念変容の可能性、セラピスト側のコンパッショントレーニングの重要性が示された。
16) 他者に対する尊敬を高める介入法が攻撃性を低減させる効果の検討	共著	平成28年3月	ヒューマン・ケア研究, 16, 83-92.	共著: 二神佳代, <u>石村郁夫</u> 他者に対する尊敬を高める介入法により、他者に対する敵意感情が軽減される効果が示された。
17) Strengthspotting and the Interpersonal Relationships: Development of Japanese Version of the Strengthspotting Scale	共著	平成28年8月	GSTF Journal of Psychology, 2, 29-36.	共著: 駒沢あさみ, <u>石村郁夫</u> ストレングス・スポッティング尺度を邦訳し、信頼性と妥当性を検討した結果、他者の強みを容易に見出せる人はコミュニケーションスキル、親和動機、楽観性が高いことが示された。
18) (学術論文・査読無し)				
1) フロー体験に関する研究の動向と今後の可能性	共著	平成20年3月	筑波大学心理学研究, 36, 85-96.	共著: <u>石村郁夫</u> , 河合英紀, 國枝和雄, 山田敬嗣, 小玉正博 近年のフロー体験に関する研究の動向を概観し、これまでの研究課題を指摘したうえで、今後の研究の方向性を示したレビュー論文である。
2) 嫌悪場面に対する回避傾向尺度の開発—大学生における不登校への予防的アプローチを目指して—	共著	平成22年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 10, 3-15.	共著: 黒川泰貴, 西村昭徳, <u>石村郁夫</u> 本研究では大学生の不登校傾向を測定する尺度を開発し、その信頼性と妥当性を検討した。回避傾向の大学生は、自己開示、反すうの制止、コミュ

3) バーンアウトに対するポジティブ心理学的アプローチ : Lonsdale らによる質的研究と量的研究の接合	共著	平成 22 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 10, 127-144.	ニケーション能力の向上が望まれることが示唆された。 共著 : 市村操一、羽鳥健司、 <u>石村郁夫</u> 、川北準人 本論文では、競技への積極的関与を高めることで競技者のバーンアウトを防ごうとする方向性を持った研究について、質的研究と量的研究の観点から概観した。
4) 親子の情緒的ふれあい行動と育児ストレス及び満足感との関連	共著	平成 23 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 11, 10-23.	共著 : 南玲名、 <u>石村郁夫</u> 親子の情緒的ふれあい行動を測定する尺度を開発し、育児ストレスと満足感との関連を検討した結果、情緒的ふれあい行動、配偶者のサポートの有無、情動共感性の高さ、母子一体感が育児満足感を高めることが示された。
5) 青年期における親準備性や父性度が叱り方に及ぼす影響	共著	平成 23 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 11, 24-36.	共著 : 福田貴広、 <u>石村郁夫</u> 叱る行動を測定する尺度を開発し、親準備性と親役割観が叱り方にどのような影響を及ぼすのか検討した結果、男性は受容的な親役割観を持つことによって叱れなくなり、叱ることで罪悪感を持つことが示された。女性は使命感を持って子どもに叱ることを意味を伝えるために叱ることが示された。
6) 高等学校男子バスケットボール競技者の積極的関与とバーンアウトの関係	共著	平成 25 年 3 月	東京成徳大学研究起用一人文学部・応用心理学部一, 20, 15-21.	共著 : <u>石村郁夫</u> 、川北準人、浅野憲一、羽鳥健司、長岡修二、市村操一 高等学校男子バスケットボール競技者の積極的関与とバーンアウトとの関係を検討した結果、単に疲労感・消耗感から発生するのではなく、達成感の低下や価値観の変化によってバーンアウトを引き起こす可能性が示された。
7) バスケットボール選手の価値観と達成指向はスポーツ態度を予測するか?	共著	平成 25 年 3 月	東京成徳大学研究起用一人文学部・応用心理学部一, 20, 1-13.	共著 : 市村操一、川北準人、 <u>石村郁夫</u> 、浦井孝夫、羽鳥健司、近藤明彦 バスケットボール部に所属する大学生 93 名を対象にしてスポーツ態度と達成目標の関係を検討した結果、能力の向上への動機づけが強ければ献身行動が促進され、課題指向性が強ければ習慣や伝統を重んじる傾向が見られた。
8) 大学生の睡眠状況が不	共著	平成 25 年 3	東京成徳大学臨床心	共著 : 黒川泰貴、 <u>石村郁夫</u>

登校傾向に及ぼす影響		月	理学研究, 13, 3-16.	大学生 139 名を対象にして大学生の睡眠状況と不登校傾向との関連を検討した結果, 大学生の睡眠は, 授業意欲の低下, 学校嫌悪感, 抑うつ傾向との関連が見られ, 大学生の睡眠の乱れが不登校傾向に影響することが推察された。
9)学校嫌悪感の高い中学生における自己開示および対人ストレスコーピングの特徴	共著	平成 25 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 13, 17-27.	共著: 風間和, 石村郁夫, 杉本好行 学校嫌悪感の高い中学生における自己開示および対人ストレスコーピングの特徴を検討した結果, 学校嫌悪感が高くても自己開示していれば, 援助要請, 積極的対処, 思考の転換を行う程度が高くなり, 援助要請を行っていれば自己開示を行う程度が高くなること示され, 自己開示や援助要請行動を獲得させる支援の重要性が示唆された。
10)Garder と Moor によるスポーツのパフォーマンス向上のための“マインドフルネス・アクセプトランス・コミットメント・アプローチ”の介入プログラムの紹介	共著	平成 25 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 13, 119-149.	共著: 市村操一, 鈴木壮, 石村郁夫, 羽鳥健司, 浅野憲一 Garder と Moor によるスポーツのパフォーマンス向上のための“マインドフルネス・アクセプトランス・コミットメント・アプローチ”の介入プログラムの 7 つのモジュールを紹介し, 競技者のパフォーマンス向上に対する新しい提言を行った。
11)心理学領域における愛に関する研究の概観	共著	平成 25 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 13, 150-156.	共著: 羽鳥健司, 石村郁夫, 市村操一, 小金井希容子, 北見由奈 1980 年以降の愛に関する実証研究について, 歴史, 分類, 測定方法, 最新の愛研究の観点から概観し, 愛の定義の曖昧さ, 身体的接触が有する心理学的効果などの課題を抱えていることを示した。
12) 肯定的感情に関する心理学的実証研究の紹介	共著	平成 25 年 11 月	埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 13, 69-81.	共著: 羽鳥健司, 石村郁夫, 小玉正博 ポジティブ心理学の中心概念である肯定的感情に関する実証研究を概観し, 肯定的感情の機能や今後の課題について述べた。
13)過剰適応傾向にある中学生の友人関係における自分らしさに関する研究—ストレス反応および学校享受感の観点から—	共著	平成 26 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 14, 7-14.	共著: 風間和, 石村郁夫 過剰適応傾向のある中学生の友人関係において自分らしくいられるとストレス反応や学校享受感は悪くならないことが示された。

14) 上司が部下の強みを見出すことによる効果の研究	共著	平成 26 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 14, 15-23.	共著: 村田典子、駒沢あさみ、石村郁夫 部下を抱える上司に対して部下の強みを見出すストレングス・スポッティングの技術を教える 2 回にわたる研修会の効果を検証した。
15) ポジティブ心理学的介入法の研究動向とその臨床的応用	共著	平成 26 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 14, 169-178.	共著: 駒沢あさみ、石村郁夫 ポジティブ心理学的介入法の研究動向を概観し、我が国における研究の方向性を示した。
16) 自己目的的パーソナリティの関与度、対処行動、ストレス反応の特徴	共著	平成 26 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 14, 123-130.	共著: 石村郁夫、小玉正博 自己目的的パーソナリティの生活関与度、対処行動、ストレス反応の特徴に関して分散分析を行った結果、生活に対して関与度が高く、統制不能状況においても積極的な対処方略を採用することが示された。
17) 日本語版セルフ・コンパッション尺度の作成および信頼性と妥当性の検討	共著	平成 26 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 14, 141-153.	共著: 石村郁夫、羽鳥健司、浅野憲一、山口正寛、野村俊明、鋤柄のぞみ、岩壁茂 セルフ・コンパッション尺度を邦訳し、信頼性と妥当性の検証を行った結果、原尺度と同じ因子構造を示し、自己嫌悪感、見捨てられ不安、親密性の回避、恥感情、情緒不安定性、ミスへのとらわれと負の相関が見られることが示された。
18) 情動知能に関するポジティブ心理学的研究の概観	共著	平成 26 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 14, 179-188.	共著: 羽鳥健司、石村郁夫、小玉正博 ポジティブ心理学の観点から、情動知能に関する歴史や理論、測定法、研究動向、介入法の観点から概観し、本邦における今後の展望について述べた。
19) 感情処理および感情表出に関するポジティブ心理学的研究の概観	共著	平成 26 年 3 月	埼玉学園大学紀要 (人間学部篇), 14, 21-28.	共著: 羽鳥健司、石村郁夫 ストレスに曝された時の感情の処理と表出に関するポジティブ心理学的研究を概観し、今後の展望について述べた。
20) 思いやり深い愛 (コンパッションネイト・ラブ) が形成される夫婦の共通性について—高齢期夫婦 2 人世帯の語りを通して—	共著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 15, 57-68.	共著: 渡辺詩津、石村郁夫 高齢期二世帯夫婦 8 組 16 名を対象に半構造化面接を実施し、思いやり深い愛情の共通点を M-GTA により抽出した結果、結婚当初から手塩に愛情関係を構築し、お互いに言いたいことを言い合う関係性やセルフ・ケアをする

21) 大学生における外傷後の他者サポートがコミットメントや意識の変化に及ぼす影響	共著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 15, 119-128.	重要性が示された。 共著：丸山亮光、石村郁夫、田中輝美 外傷体験後の他者による情緒的サポートにより意識の変容やコミットメントが高まることが示された。
22) 聴覚障がい者が感じる聴者とのコミュニケーションの障壁についての面接調査	共著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 15, 156-162.	共著：逸見知美、石村郁夫 聴覚障害のある 7 名に対して半構造化面接を実施し、M-GTA により分析した結果、誤解や差別の体験により否定的な自己イメージや聴者に対する抵抗感が生じていることが示された。
23) 一時保護所における児童への感情労働が本来感を介してバーンアウトに及ぼす影響	共著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 15, 163-168.	共著：阪無勇士、石村郁夫 一時保護所の職員は児童との関わりの中で肯定的な関わりをしていれば本来感が高まり、結果としてバーンアウトを抑制することが示された。
24) 大学生における強みとキャリア意識及び職業興味との関連	共著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 15, 169-177.	共著：駒沢あさみ、石村郁夫 大学生において強みを自覚していればいるほど将来に対して明確な目標を持っており、積極的に行動していることが示され、特定の強みは特定の職業興味と関連しており、強みから職業選択へのヒントが得られることが示された。
25) 大学生における強みの自覚がうつ・不安症状に及ぼす影響	共著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 15, 178-186.	共著：石村郁夫、駒沢あさみ 大学生における強みの自覚は、抑うつ症状や不安症状と負の相関にあることが示され、抑うつや不安の予防として強みの自覚を促すことが重要であることが示された。
26) 慢性疼痛保有者が受ける情緒的サポートと痛みに対する意味づけとの関連	共著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 15, 209-217.	共著：栗原里美、石村郁夫 慢性疼痛保有者の家族から受ける情緒的サポートが高い場合、痛みから積極的な意味を見出しており、逆に低い場合は自己卑下感に繋がることを示された。
27) 謙虚に関するポジティブ心理学的研究の概観	共著	平成 27 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究 15, 224-229.	共著：羽鳥健司、石村郁夫 ポジティブ心理学の視点から謙虚に関する実証研究を概観した結果、謙虚は低い自尊心ではなく正確に自己概念を査定できること、自分を優先しないことで特徴づけられる文献がみられた。

28) ネガティブ感情の受容困難さと抑うつにおける双方向性の影響過程	共著	平成27年3月	東京未来大学研究紀要, 8, 169-177.	共著：山口正寛、石村郁夫、鋤柄のぞみ、野村俊明 ネガティブ感情の受容困難さ尺度を開発し、縦断研究により抑うつに及ぼす影響を検討した結果、ネガティブ感情の受容困難さが抑うつ症状を高めることが示された。
29) 子どもの強みが抑うつ傾向に及ぼす影響の検討	共著	平成28年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 16, 104-112.	共著：丸山亮光、石村郁夫 小学校5、6年の児童は強みの自覚によって抑うつ傾向を軽減することが示され、小学校教諭は児童の強みを活用するニーズがあることが示された。
30) ひきこもり状態から回復への認知過程—家族への認知を中心に—	共著	平成28年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 16, 113-123.	共著：橋本知佳、石村郁夫 9名のひきこもり経験者へ半構造化面接を実施し、M-GTAによる解析の結果、ひきこもり状態から回復へ至る家族の対応としては、家族はひきこもり者の主体性を尊重しながら共感的・情緒的にサポートすることの重要性が示された。
31) 劣等感による否定的な影響を緩和させる要因—感情体験と共感・被共感経験に着目して—	共著	平成28年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 16, 145-153.	共著：鈴木秀明、石村郁夫 劣等感の否定的な影響を緩和させるには、共感経験や被共感経験を積み重ね、豊かな感情体験を体験し、そのことにより社会適応が改善されることが示された。
32) 強みと心理的ウェルビーイングとの関連の検討	共著	平成28年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 16, 170-180.	共著：駒沢あさみ、石村郁夫 強みの自覚により、主観的・心理的ウェルビーイング、抑うつの高さと関連していることが示された。
33) 過去のいじめによる心的外傷体験と否定的認知の変容に関する調査	共著	平成28年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 16, 181-192.	共著：寺井治樹、石村郁夫 いじめ被害経験の内、約39%がPTSD症状を呈しており、その症状は他者からの支えの他者連帯感により軽減されることが示された。
34) 一時保護所における児童の外在的な問題への効果的な関わり方	共著	平成28年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 16, 193-204.	共著：阪無勇士、石村郁夫 一時保護所の児童の効果的な対応として、“受容・共感的な関わり”“指示的な関わり”“指導構造の調整”が抽出され、受容・共感的な関わりが最も効果があることが示された。
35) 筆記と語りに関する	共著	平成28年3月	東京成徳大学臨床心	共著：羽鳥健司、石村郁夫

ポジティブ心理学的研究の概観		月	理学研究 16, 205-212.	筆記表現法やナラティブに関する実証研究を概観し、ネガティブな感情を表現することの効果に関して3つの研究プロセスから整理した。
36) 慢性疼痛研究の動向と今後の展望－心理社会的側面に焦点を当てて－	共著	平成28年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 16, 213-220.	共著：栗原里美、石村郁夫 慢性疼痛に大きく寄与している心理・社会的要因に焦点を当てて、慢性疼痛研究の現状を概観し、今後の展望について考察した。
37) 回避型援助要請スタイルを持つ中学生に対する援助の必要性に関する研究	共著	平成29年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 17, 105-115.	共著：勝又靖博、石村郁夫 回避型の援助要請スタイルを持つ中学生が相談できない苦しみを訴え、援助の必要性があるが示唆された。
38) 中学生におけるいじめ仲裁者に備わる勇氣に関する研究－新しい勇氣尺度を用いて－	共著	平成29年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 17, 145-152.	共著：寺井治樹、石村郁夫 中学生におけるいじめ仲裁者の勇氣が仲裁行動や被害者援助行動に正の影響を及ぼしていることを示した。
39) 発達障害者への告知に必要な支援とは？－当事者への面接調査を通して－	共著	平成29年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 17, 153-159.	共著：臼井潤記、石村郁夫 発達障害当事者への診断告知の際の実態調査から、本人のニーズや保護者の関わり方を調査し、診断告知の際に必要な支援について検討した。
40) 一時保護所職員による児童の内在的な問題への効果的な関わり方	共著	平成29年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 17, 160-172.	共著：阪無勇士、石村郁夫 一時保護所職員による児童の内在的な問題に対して、受容的な関わりが最も効果が高いことが示された。
41) 一時保護所職員が認知する児童の外在的な問題と背景要因および援助意図に関する研究	共著	平成29年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 17, 173-183.	共著：阪無勇士、石村郁夫 一時保護所の児童の問題行動の背景に虐待の影響や愛着形成の不全が示唆され、職員による専門性の高いケアを意図した関わりの技能向上や施設整備をし、改善していくことが求められた。
42) 情熱に関する心理学研究の概観－Vallerandの情熱研究を中心に－	共著	平成29年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 17, 198-208.	共著：羽鳥健司、石村郁夫 情熱 (Passion) に関する心理学研究を概観し、今後の展望について論考した。
43) がんサバイバーに対する家族のサポートが治療意欲及び心理的適応を促進するプロセス	共著	平成30年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 18, 30-38.	共著：飯島誠、石村郁夫 がんサバイバーに対する家族のサポートが治療意欲を高め、心理的適応を促進していることがわかった。

44) 高校教員が生徒のメンタルヘルス不調と関連があると考える諸問題の実態と支援	共著	平成30年3月	東京成徳大学臨床心理学研究 18, 177-182.	共著:佐藤修哉、上埜高志、安保英勇、石村郁夫 高校生のメンタルヘルス不調に関連があると考える諸要因として、行動上の兆候、学業での兆候、家庭内要因、対人関係、他者からの伝聞、個人内のパーソナリティが抽出された。
45) あがりへの過度な意識集中が主観的成功感に与える影響	共著	平成30年3月	つくば国際大学 産業社会学部 研究紀要 24, 1-12.	共著:山田圭介・石村郁夫・杉江征 あがりへの過度な意識集中が主観的成功感を抑制することが示された。
(招待講演) 1) The practice and challenges of positive psychological interventions for university students	共著	平成28年7月	Programme of the 6th Asian Congress of Health Psychology 2016, PACIFICO Yokohama, Japan.	共著: <u>Ishimura, I.</u> , Komazawa, A., Hatori, K. 強みを発見し、活用させるポジティブ心理学的介入を実施したところ、1名を除いて効果が見られ、その1名の面接調査から“幸せ恐怖”尺度得点が高いことが示され、介入の抵抗に関して考察した。
(学会発表・審査有り) 1) Assessing flow in daily life: The flow scale in daily life (FSDL).	共著	平成16年8月	Proceedings of the 2nd Asian Congress of Health Psychology, 289, Seoul, Korea.	共著: <u>Ishimura, I.</u> , Kodama, M. 日常生活におけるフロー体験の特徴を探索的に抽出し、測定尺度の開発を行った。
2) The influence of flow experience on emotions and self-development.	共著	平成18年8月	Proceedings of 2006 International Congress of Psychotherapy in Japan and The Third International Conference of the Asian Federation for Psychotherapy, 137, Tokyo.	共著: <u>Ishimura, I.</u> , Kodama, M. 日常生活において目の前のことに専心するフロー体験の頻度が高くなると、ポジティブ感情が生起し、その結果として、新しい自分を開拓しようとする自己形成意識が高まることが示された。
3) The role of flow experience on stress response.	共著	平成19年9月	Proceedings of the 3rd Asian Congress of Health Psychology, 42, Tokyo.	共著: <u>Ishimura, I.</u> , Kodama, M. 日常生活においてフロー体験の頻度が高いタイプの人には困難状況に晒されても回避的な対処方略を使用せずに、積極的に対処することが示された。
4) Feelings of strengths and limitations of self-concept in flow activities.	共著	平成20年7月	Proceedings of the 4th European Conference of Positive Psychology, 308, Rijeka, Croatia.	共著: <u>Ishimura, I.</u> , Kodama, M. フロー状態においてどのように自己概念を感じているか長所と短所の観点から検討し、フロー状態はポジティブな自己概念を伴いやすいが、同時

<p>5) Psychoeducational intervention to maintain flow activities in everyday life; Improvement in stress response and affective state.</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年7月</p>	<p>Abstracts of the 29th International Congress of Psychology, 497、Berlin, Germany.</p>	<p>にネガティブな自己概念も比較的高いことが示された。</p> <p>共著：Ishimura, I.、Kawai, H.、Kunieda, K.、Yamada, K.、Kodama, M. フロー体験を促進し、維持させる介入を施し、その予防効果として、ストレス反応や感情状態の変化を検討したところ、実験参加者の抑うつや不安感情が低減し、無気力的認知や思考が改善された。</p>
<p>6) Relation between autotelic personality and time perspective.</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年8月</p>	<p>Abstract Book of the 10th International Congress of Behavioral Medicine, 83、Tokyo.</p>	<p>共著：Ishimura, I.、Kodama, M. 日常生活においてフロー体験をしやすい個人特性が備わった人は目標指向性が高く、時間管理能力が優れていることが示された。</p>
<p>7) Development of the psychoeducational intervention techniques to maintain flow experience and the demonstration of the intervention effect on apathy and depression.</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年6月</p>	<p>First World Congress on Positive Psychology, 23、Pennsylvania, USA.</p>	<p>共著：Ishimura, I.、Kawai, H.、Kunieda, K.、Yamada, K.、Kodama, M. フロー体験を促進し、維持させることで、抑うつや不安感情を低減させ、活動的快感情が増加させ、さらに無気力的認知や思考が改善させる心理教育プログラムを開発した。</p>
<p>8) Sensor-based correlation analysis between office activities and psychological states.</p>	<p>共著</p>	<p>平成22年6月</p>	<p>Book of Abstracts of the 5th European Conference of Positive Psychology, 72、Copenhagen, Denmark.</p>	<p>共著：Kamiya, Y.、Kawai, H.、Ishimura, I.、Kodama, M.、Kunieda, K.、Yamada, K. オフィスにおける従業員の心理状態と活動状態の相関分析の結果、質問紙で回答した内容とオフィスに設置されたセンサデータから取得した活動内容（コミュニケーション、PC操作、滞在場所）との間には、中程度の有意な相関が見られ、その時の心理状態の表れ方には個人差があることが示された。</p>
<p>9) Effects of flow induced technique in group on emotions and idea production.</p>	<p>共著</p>	<p>平成22年8月</p>	<p>Proceedings of the International conference of 4th Asian Congress of Health Psychology, P028, Taipei, Taiwan.</p>	<p>共著：Ishimura, I.、Kawai, H.、Kunieda, K.、Yamada, K.、Yakoshi, S.、Kodama, M. フロー体験を喚起する技法とリラクゼーション技法を実施した結果、フロー体験を喚起する技法はより集団成員の活動的快やアイデアの産出量を増加させ、倦怠感を低下させることが示された。</p>

10) The variance of affective states by drawing the picture of the happiest memories.	共著	平成 23 年 7 月	Abstract book of plenary meeting of the international society of research on emotion 2011, 276、Kyoto.	共著 : <u>Ishimura, I.</u> 、Hatori, K.、Kodama, M. 人生の中で最も幸せな瞬間をテーマとする描画の前後でどのような感情が喚起されるか検討した結果、ネガティブ感情が低減し、穏やかな等の低い覚醒水準のポジティブ感情、肯定的解釈、内省的思考や動機づけが高まることが示された。
11) Writing about the perceived benefits of interpersonal transgression on subjective well-being and hostility in Japanese college students.	共著	平成 23 年 7 月	Abstract book of plenary meeting of the international society of research on emotion 2011, 119、Kyoto.	共著 : Hatori, K.、 <u>Ishimura, I.</u> 、Kodama, M. 日本人大学生を対象に対人関係の軋轢から生じる肯定的な意味について筆記させた結果、統制群と比較して敵意が軽減され、主観的幸福感が高まることが示され、従来の外傷体験を記述するより効果が高いことが示唆された。
12) Culturally sensitive positive psychological intervention among Japanese college students (1): An overview of the program and its effects on well-being.	共著	平成 23 年 8 月	Poster presented at the 6th World Congress for Psychotherapy, 342, Sydney, Australia.	共著 : Kodama, M., Kawasaki, N., <u>Ishimura, I.</u> , Hatori, K., Asano, K., Ito, M. 日本人大学生を対象にポジティブ心理学モデルに基いた 5 種類の介入を施した結果、本来感、自尊感情、心理的ウェルビーイングにおいて介入群は他の二つの統制群と比べて高まることが示された。ただし、抑うつ感情には有意差が見られなかった。
13) Culturally sensitive positive psychological intervention among Japanese college students (2): The power of Japanese calligraphy, "sho".	共著	平成 23 年 8 月	Poster presented at the 6th World Congress for Psychotherapy, 370, Sydney, Australia.	共著 : Kawasaki, N., <u>Ishimura, I.</u> , Hatori, K., Asano, K., Ito, M., Kodama, M. 自分自身を支える言葉を“書”にするワークを実施し、一週間に渡ってその言葉を声に出して読み上げる宿題を課した結果、楽しさや温かさなどのポジティブな気分が高められ、不安やイライラなどのネガティブな気分が軽減された。
14) Culturally sensitive positive psychological intervention among Japanese college students (3): Awareness on and reframing of self-talk about one's weakness.	共著	平成 23 年 8 月	Poster presented at the 6th World Congress for Psychotherapy, 351, Sydney, Australia.	共著 : Asano, K., Ito, M., Kodama, M., Kawasaki, N., <u>Ishimura, I.</u> , Hatori, K. 自動思考に気付くためにセルフトークを観察し、否定的思考を肯定的思考に再構成するワークと短所や欠点を書いたカードに別の方がリフレーミングするワークを実施した結果、ポジティブ感情が高められ、ネガティブ

<p>15) Culturally sensitive positive psychological intervention among Japanese college students (4): Discovering the seeds of human strength in one's adversity.</p>	<p>共著</p>	<p>平成 23 年 8 月</p>	<p>Poster presented at the 6th World Congress for Psychotherapy, 392, Sydney, Australia.</p>	<p>感情が軽減されたことが示された。 共著 : <u>Ishimura, I.</u>, Hatori, K., Asano, K., Ito, M., Kodama, M., Kawasaki, N. 過去の失敗や成功体験から自分の弱みと強みを自己価値カードに記入し、グループで討議するワークを実施した結果、ポジティブ感情が高められ、ネガティブ感情が軽減されたことが示された。</p>
<p>16) Culturally sensitive positive psychological intervention among Japanese college students (5): Thankfulness brings the awareness of being connected to others.</p>	<p>共著</p>	<p>平成 23 年 8 月</p>	<p>Poster presented at the 6th World Congress for Psychotherapy, 406, Sydney, Australia.</p>	<p>共著 : Hatori, K., Asano, K., Ito, M., Kodama, M., Kawasaki, N., <u>Ishimura, I.</u> 感謝したい人を思い浮かべ、どんなことを感謝したいか列挙し、その人への感謝の手紙を書くワークを実施した結果、その前後でポジティブ感情が高められ、ネガティブ感情が軽減されたことが示された。</p>
<p>17) Effects of the self-affirmative task for self-compassion on self-feelings, multiple mood states, and interpersonal relationships.</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 6 月</p>	<p>Poster presented at the 6th European Conference on Positive Psychology, 253, Moscow, Russia.</p>	<p>共著 : <u>Ishimura, I.</u>, Hatori, K., Kawasaki, N., Kodama, M. 自己への思いやりの態度を育成・強化することで生じる効果について自己感情、多面的感情状態、対人関係性の幅広い観点から検討した結果、抑鬱・不安感情が低減され、本来感、自尊感情、自己への思いやりが高められ、ありのままの自分で振る舞えるようになることが明らかにされた。</p>
<p>18) Emotional effects of remembering self-supportive words written mindfully as Japanese Sho calligraphy.</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 6 月</p>	<p>Poster presented at the 6th European Conference on Positive Psychology, 254, Moscow, Russia.</p>	<p>共著 : Kawasaki, N., Kodama, M., <u>Ishimura, I.</u> “書”による長期的な効果を検討するために一週間書き留める宿題を実施した結果、その有効性が確かめられ、肯定的感情は差が見られなかったものの、否定的感情が有意に軽減された。</p>
<p>19) Positive Psychology Intervention Program for Personal Development: A Japanese Approach.</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 6 月</p>	<p>Poster presented at the 6th European Conference on Positive Psychology, 258, Moscow, Russia.</p>	<p>共著 : Kodama, M., Kawasaki, N., <u>Ishimura, I.</u> 前年度に開発されたプログラムを簡略化し、多施設実施の有効性を検証した結果、グループ A では本来感、自尊心、人生の目的等が高められたが、グループ B は限定的な結果に留まったことが示された。</p>

20) An Explorative Study of Personal Strengths and Weaknesses among Japanese College Students – On a Perspective of Using Strengths for Other People.	共著	平成 24 年 6 月	Poster presented at the 6th European Conference on Positive Psychology, 325, Moscow, Russia.	共著 : Komazawa,A, <u>Ishimura, I.</u> 日本人大学生を対象に強みと弱みの自覚の程度や強みを日常的に活用し、弱みを克服したいと思うかの意欲の程度を尋ねた結果、弱みは自覚している一方で強みはあまり自覚していないことが示された。また、強みを日常的に活用することに抵抗感はないと回答している傾向にあった。
21) Positive psychological resources among Japanese university students with deep depression and anxiety: A study of flow experience and strength-awareness.	共著	平成 24 年 11 月	International Journal of Psychiatry in Clinical Practice, 30-31, Barcelona, Spain.	共著 : <u>Ishimura, I.</u> , Komazawa,A. 日本人大学生を対象に強みの自覚の程度とフロー体験の頻度などのポジティブな資源を尋ね、STAI 日本語版や SDS に回答を求めた結果、日常的にフロー体験が生じる活動が一つあることや強みの自覚があればあるほど不安障害やうつ病のリスクが低いことが示された。
22) Intervention for a sleep health program on the basis of cognitive behavioral therapy through e-mail newsletters for Japanese students.	共著	平成 24 年 11 月	International Journal of Psychiatry in Clinical Practice, 15-16, Barcelona, Spain.	共著 : Asano, K, <u>Ishimura, I.</u> 60 名の介入群には一週間、睡眠に関する心理教育を施し、4 週間に渡って睡眠日誌を付けてもらい、61 名の統制群は睡眠に関する心理教育を施した結果、特に、睡眠状況の改善は両群で差は見られなかったものの、抑うつ症状が統制群と比べて介入群において有意に低減したことが示された。
23) Psycho-educational intervention on self-compassion attitude and its effects on depressive symptoms.	共著	平成 24 年 11 月	International Journal of Psychiatry in Clinical Practice, 34-35, Barcelona, Spain.	共著 : Koganei, K, <u>Ishimura, I.</u> , Hatori, K, Asano, K, Yamaguchi, M, Nomura, T, Sukigara, N. 自己への思いやりの態度を育成する自己肯定課題を実施し、うつ状態や反すうが軽減され、問題解決策を探ろうとし適度に気分転換できるようになることが示された。さらに、将来を悲観するのではなく対処方法や希望を見い出せるようになることが示された。
24) Characteristics of self-compassion and self-disgust on attachment styles.	共著	平成 24 年 11 月	International Journal of Psychiatry in Clinical Practice, 51-52, Barcelona, Spain.	共著 : Nomura, T, <u>Ishimura, I.</u> , Koganei, K, Hatori, K, Asano, K, Yamaguchi, M, Sukigara, N. 愛着スタイルのタイプによる自己への思いやりと自己嫌悪感の特徴を検討した結果、安定・回避型は自己への思いやりが高く、不安・混乱型は自己嫌悪感が高いことが示された。

25) Effects of the self-affirmation task for self-compassion on automatic thoughts, perfectionism cognition and worry.	共著	平成 25 年 8 月	Program of the 4th Asian Cognitive Behavior Therapy (CBT) Conference 2013 Tokyo, (A-P-201), 61, Japan.	共著 : <u>Ishimura, I.</u> , Hatori, K., Asano, K., Yamaguchi, M., Nomura, T., Sukigara, N. 4 週間に渡る自己肯定課題を実施した結果、ネガティブな自動思考を消失し、完璧主義や心配傾向が軽減した。完璧主義における高目標設置は予想に反して高まったことが示された。
26) Exploratory examination of medical and psychological treatment-seeking tendencies for premenstrual syndrome	共著	平成 25 年 11 月	Proceedings of the Global Symposium on Social Sciences 2013, 4, 460-461.	共著 : Kudo, M., <u>Ishimura, I.</u> , & Aoki, S. PMDD や中等症 PMS は治療を求める傾向にあり、PMDD はより心理治療を求める傾向にあることが示された。
26) Research on the effects of managers' identification of the strengths of subordinates.	共著	平成 26 年 7 月	Programme of the 7th European Conference on Positive Psychology 2014, 42, Amsterdam.	共著 : <u>Ishimura, I.</u> , Murata, N., & Komazawa, A. 上司に部下の強みを見出す研修会を実施した結果、上司側の部下の強みを見出すことの動機づけや能力は高まったものの、部下のストレス反応や仕事満足感には影響を及ぼさないことが示された。
27) The effects of gratitude intervention in Japanese college students.	共著	平成 26 年 7 月	Programme of the 7th European Conference on Positive Psychology 2014, 41, Amsterdam.	共著 : Hatori, K., & <u>Ishimura, I.</u> 普段の出来事を感謝するように介入を施した結果、肯定的感情が高まり、否定的感情が低まることが示された。特に、集団で感謝を述べ合う介入法は効果が見られた。
28) Strengthspotting and relationship with others	共著	平成 26 年 7 月	Programme of the 7th European Conference on Positive Psychology 2014, 40, Amsterdam.	共著 : Komazawa, A. & <u>Ishimura, I.</u> ストレングス・スポッティング尺度を邦訳し、原尺度と同じ因子構造が抽出された。他者の強みを見出せる人はコミュニケーションスキル、親和動機、楽観性が高いことが見い出され、恥感情が低いことが見い出された。
29) The effects of gratitude intervention for daily life on positive and negative emotions in Japanese college students: interim report	共著	平成 28 年 7 月	Programme of the 31st International Congress of Psychology, 2016, PS27P-11-110, Yokohama, Japan	共著 : Hatori, K., <u>Ishimura, I.</u> , Kodama, M. 大学生を対象に、感謝日記を書くように介入した結果、有意にポジティブ感情が増加し、ネガティブ感情が軽減することが示された。

(学会発表・審査無し)				
1) 日常生活におけるフロー感覚の構造および心身の健康との関連	共著	平成16年9月	日本健康心理学会第17回大会発表論文集, 274-275、東京.	共著：石村郁夫、小玉正博 日常生活におけるフロー体験の特徴を探索的に抽出したところ、他者との一体感などの人間関係の広がりに関する記述が多く見られた。そのため、日常生活においてフロー体験の頻度が高いと、積極的な他者関係を築くことと関連があることが見出された。
2) 日常生活におけるフローの様相および精神的健康との関連	共著	平成17年5月	日本感情心理学会第13回大会プログラム・予稿集, 23、名古屋.	共著：石村郁夫、小玉正博 日常生活においてフローを体験する頻度が多いと目標に向かってチャレンジしているのでストレス反応が低減するわけではなく、人生満足感や意味づけの獲得がなされることが示された。
3) フロー体験と自尊心および自己効力感との関係—フロー体験後の変化に関する探索的検討を踏まえて—	共著	平成17年9月	日本健康心理学会第18回大会・日本心理医療諸学会連合第18回学術大会合同大会発表論文集, 72、神戸.	共著：石村郁夫、小玉正博 フロー体験後の変化に関する探索的検討の中で、自尊心と自己効力感に関する記述が見られた。こうした変数に焦点を当てて縦断的検討をしたところ、フロー体験の頻度はその後の自尊心の高さと関連があることが見出された。
4) 内発的な報酬を伴う活動におけるフローと生活感情との関係	共著	平成18年5月	日本感情心理学会第14回大会プログラム・予稿集, 25、広島.	共著：石村郁夫、小玉正博 日常生活の中でフロー体験をしやすい人の生活感情として、エネルギーシユなどの活動的快感情が多く、退屈などの倦怠感や抑うつや不安感情が低いことが示された。
5) フロー体験がポジティブな資質に与える影響	共著	平成18年9月	日本健康心理学会第19回大会発表論文集, 163、京都.	共著：石村郁夫、小玉正博 日常生活におけるフロー体験はその後のポジティブ感情の生起に影響を与え、新しい自分を開拓しようとする自己形成意識を促進させることが示された。
6) 日常生活におけるフロー体験と時間意識との関係	共著	平成19年5月	日本感情心理学会第15回大会プログラム・予稿集, 31、大阪.	共著：石村郁夫、小玉正博 日常生活においてフロー体験をしやすい個人特性が備わった人は目標指向性が高く、時間管理能力が優れていることが示された。
7) フロー体験者の抗ストレス資源に関する研究	共著	平成19年8月	日本健康心理学会第20回記念大会発表論文集, 39、東京.	共著：石村郁夫、小玉正博 日常生活においてフロー体験をしやすいタイプの人には困難状況に晒されても回避的な対処方略を使用する

8) フロー体験と活動後の評価との関係	共著	平成19年9月	日本心理学会第71回大会発表論文集, 897、東京.	<p>ことなく、肯定的に状況を解釈して、積極的に何事にも関わることが示された。</p> <p>共著：石村郁夫、小玉正博 フロー体験の生じる活動を通して、次の活動に対するモチベーションが向上したり、自分が成長したという実感が伴ったりすることが示された。</p>
9) 経験抽出法とフロー体験チェック・リストで測定されるフローに関する検討	共著	平成20年5月	日本感情心理学会第16回大会プログラム・予稿集, 27、東京.	<p>共著：石村郁夫、河合英紀、國枝和雄、山田敬嗣、小玉正博 経験抽出法と質問紙法の相違によって、測定されるフロー体験の生じる活動内容やその頻度を検討したところ、相関係数は.6前後で両者はほぼ類似していることが示された。</p>
10) 日常生活におけるフロー体験と対人関係性の検討	共著	平成20年9月	日本健康心理学会第21回大会発表論文集, 195、東京.	<p>共著：石村郁夫、河合英紀、國枝和雄、山田敬嗣、小玉正博 フロー体験をしやすい人は、人との関係を避けたり、他者に心を閉ざしたりするといった関わりはせずに、他者に優しく働きかけたりすることが示唆された。</p>
11) フロー体験の促進プログラムの介入効果に関する研究	共著	平成20年9月	日本心理学会第72回大会発表論文集, 1058、札幌.	<p>共著：石村郁夫、河合英紀、國枝和雄、山田敬嗣、小玉正博 フロー体験を促進させる介入によって、活動的快感情を増加させ、抑うつや不安感情や無気力的認知・思考を改善させることが示された。</p>
12) 集団活動の種類とフロー状態および創造性との関連	共著	平成21年5月	日本感情心理学会第17回大会プログラム・予稿集, 37、徳島.	<p>共著：石村郁夫、河合英紀、國枝和雄、山田敬嗣、小玉正博 集団の創造性やひらめきを高める状態として、フロー体験の影響が示され、こうしたフロー状態やリラックスした雰囲気作りが円滑な相互作用を促進させることが推察された。</p>
13) フロー状態におけるアイデア産出量に関する研究	単著	平成21年9月	日本心理学会第73回大会発表論文集, 992、京都.	<p>共著：石村郁夫、河合英紀、國枝和雄、山田敬嗣、小玉正博 覚醒度の高いフロー状態と覚醒度の低いリラックス状態におけるアイデア産出量の違いを検討したところ、フロー状態においてアイデア産出量が多く、さらに、フロー体験をしやすい人はより多くのアイデアを産出することが示された。</p>

14) おりづる課題の前後における心理状態の変化に関する研究	共著	平成22年5月	日本感情心理学会第18回大会プログラム・予稿集, 38、広島.	共著: 石村郁夫、河合英紀、國枝和雄、山田敬嗣、小玉正博 おりがみでつるを折る課題の前後において、課題の前から覚醒したポジティブな状態（フロー状態）にいた人は、抑うつ状態にいた人と比べると、前者の課題遂行率は63.6%であったのに対して、後者の課題遂行率は27.3%であった。さらに、おりづる課題を完成した93.3%の人が課題修了後、目の前の課題に非常に夢中（フロー状態）になったと報告した。
15) 自分をほめる行為が強迫傾向に及ぼす影響	共著	平成22年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会第12回大会プログラム・発表論文集, 76、東京.	共著: 石村郁夫、羽鳥健司、小玉正博 自分自身をなぐさめ、慈しむ態度を高めるワークとして自分自身をほめる実験を1カ月間実施した結果、ネガティブな出来事に対する乗り越える力が増し、強迫傾向が低減されることが実証された。
16) 困難事態経験後の肯定的意味づけ研究の展望	共著	平成22年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会第12回大会プログラム・発表論文集, 67、東京.	共著: 羽鳥健司、石村郁夫、小玉正博 困難事態経験後の肯定的意味づけが行われる過程に関する実証的研究を概観し、意味づけが行われる過程の新しいモデルを提案した。
17) 共感性と情緒的巻き込まれ傾向が感情・行動の制御および精神的健康に与える影響	共著	平成22年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会第12回大会プログラム・発表論文集, 40、東京.	共著: 田口通子、小玉正博、石村郁夫 情緒的に巻き込まれやすいタイプは社会的スキルを向上させることで感情疲労を低減させることが示された。
18) 集団討議前における不安低減技法の違いが感情状態やアイデア産出量に与える影響	共著	平成22年9月	日本心理学会第74回大会発表論文集, 922、大阪.	共著: 石村郁夫、河合英紀、國枝和雄、山田敬嗣、八越忍、小玉正博 フロー体験を喚起する技法とリラクゼーション技法を実施した結果、フロー体験を喚起する技法はより集団成員の活動的快やアイデアの産出量を増加させ、倦怠感を低下させることが示された。
19) 共感性を生かす対人態度が対人ストレスと心理的 well-being に与える影響	共著	平成23年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第13回大会プログラム・発表論文集, 54.	共著: 田口通子、石村郁夫、小玉正博 高い共感性を持ちストレスを感じやすい大学生の対人態度を県とした結果、他者の評価にとらわれ過ぎず、日常的なフォーカシング態度を身に付けていると心理的 well-being（特に自己受容や環境制御力）が高められる可能性が示唆された。

20) ポジティブ心理学モデルに基づく心理的活力資源の開発(1)—介入プログラムの効果測定を中心に—	共著	平成 23 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 13 回大会プログラム・発表論文集, 59.	共著: 小玉正博、 <u>石村郁夫</u> 、羽鳥健司・浅野憲一・川崎直樹・伊藤正哉 日本人大学生を対象にポジティブ心理学モデルに基いた 5 種類の介入を施した結果、本来感、自尊感情、心理的ウェルビーイングにおいて介入群は他の二つの統制群と比べて高まること示された。ただし、抑うつ感情には有意差が見られなかった。
21) ポジティブ心理学モデルに基づく心理的活力資源の開発(2)—セルフコンパッションを高める介入法の開発—	共著	平成 23 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 13 回大会プログラム・発表論文集, 60.	共著: 石村郁夫、川崎直樹、小玉正博、羽鳥健司、浅野憲一、伊藤正哉 セルフコンパッションを高める介入法を開発した結果、自己に対する共感修得可能であり、特に、日常の出来事に対してマインドフルになって感謝することが最も効果的であることが示された。
22) ポジティブ心理学モデルに基づく心理的活力資源の開発(3)—感謝のワークが感情状態に及ぼす影響—	共著	平成 23 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 13 回大会プログラム・発表論文集, 61.	共著: 羽鳥健司、小玉正博、川崎直樹、 <u>石村郁夫</u> 、伊藤正哉、浅野憲一 感謝の表明する対象と表明の行い方の種類が感情の変化量に与える影響に関して検討した結果、「メール」と「手紙」による表明が感情の変化量に強い影響を及ぼすことが示された。
23) 課題の種類と文化的自己感がフロー体験に及ぼす影響	共著	平成 23 年 9 月	日本感情心理学会第 19 回・日本パーソナリティ心理学会第 20 回合同大会発表論文集, 55.、京都.	共著: 石村郁夫、河合英紀、國枝和雄、山田敬嗣、小玉正博 フロー体験を喚起させる個別課題と集団課題を実施して、実際に課題の種類と文化的自己観のタイプを検討した結果、関係性に価値を置く大学生はより協調的な課題においてフローを感じることを示された。
24) 集団の凝集性および有能感がフロー体験や創造性に与える影響	共著	平成 23 年 9 月	日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 930、東京.	共著: 石村郁夫、浅野憲一、羽鳥健司、市村操一、川北準人 集団の凝集性および集団の構成員の有能感が部活動中に生じるフロー体験や創造性とどのような関連が見られるかを検討した結果、集団の凝集性や有能感が部分的に示され、とりわけ集団競技における競争的達成動機の高さはフロー体験や創造性を説明しないことが明らかにされた。
25) 大学生の睡眠状態に関する類型化の試み—認知行動的要因を用いて—	共著	平成 23 年 9 月	日本心理学会第 75 回大会発表論文集, 307、東京.	共著: 浅野憲一、 <u>石村郁夫</u> 大学生を対象に睡眠状態の悪化と関連すると思われる認知行動的要因を元に類型化をした結果、4 つのクラ

<p>26)感謝の筆記が小学生の精神的健康に与える影響について</p>	<p>共著</p>	<p>平成 23 年 9 月</p>	<p>日本心理学会第 75 回大会発表論文集,434、東京.</p>	<p>スターが抽出され、各クラスターにおける入眠時選択的注意、入眠時認知活動、不眠症状における安全行動の差異が認められ、クラスターの特徴に応じた介入方法の開発に対して示唆が与えられた。</p> <p>共著：羽鳥健司、石村郁夫、小玉正博 小学生を対象に実験的に感謝の表明が精神的健康に与える影響を検討した結果、特に性差は認められず、無気力の得点が低くなり、ポジティブ感情の得点が高まったことが示された。</p>
<p>27)感謝の表明が大学生の感情状態に与える影響</p>	<p>共著</p>	<p>平成 23 年 9 月</p>	<p>日本健康心理学会第 24 回大会発表論文集,135、東京.</p>	<p>共著：羽鳥健司、小玉正博、川崎直樹、石村郁夫、伊藤正哉、浅野憲一 大学生 21 名を対象に 5 分間、周囲の人に感謝できる点を 10 個リストアップしてもらった結果、ポジティブ感情は有意に増加し、「つらい」「さびしい」「むなしい」以外のネガティブ感情が有意に減少したことが示された。</p>
<p>28)自己への思いやりの態度を育成させる介入法の効果に関する研究</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 5 月</p>	<p>日本感情心理学会第 20 回大会研究発表要旨, 2(P01)、大阪.</p>	<p>共著：石村郁夫、羽鳥健司、山口正寛、野村俊明、鋤柄のぞみ 自己への思いやりの態度を育成・強化することで生じる効果について自己感情、多面的感情状態、対人関係性の幅広い観点から検討した結果、抑鬱・不安感情が低減され、本来感、自尊感情、自己への思いやりが高められ、ありのままの自分で振る舞えるようになることが明らかにされた。</p>
<p>29)自己への思いやりの態度育成がうつ症状を軽減させる効果に関する研究</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 7 月</p>	<p>日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 14 回大会プログラム・発表論文集, 60、東京.</p>	<p>共著：石村郁夫、羽鳥健司、浅野憲一、山口正寛、野村俊明、鋤柄のぞみ 自己への思いやりの態度を育成する自己肯定課題を実施し、うつ状態や反すうが軽減され、問題解決策を探ろうとし適度に気分転換できるようになることが示された。さらに、将来を悲観するのではなく対処方法や希望を見い出せるようになることが示された。</p>
<p>30)日本語版特性感謝尺度 (GQ-6-J) 作成の試み</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 7 月</p>	<p>日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 14 回大会プログラム・発表論文集, 57、東京.</p>	<p>共著：羽鳥健司、石村郁夫 感謝を定量的に測定できる尺度を作成するために GQ-6 を日本語訳し、人生満足感、楽観性、ホープ、ポジティブ感情、主観的幸福感、抑うつ、妬み等の相関分析を行って弁別的妥当</p>

31)自分の強みを他者のために活用する行動とその背景要因の検討	共著	平成24年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第14回大会プログラム・発表論文集, 58、東京.	性を得た尺度が作成された。 共著：駒沢あさみ、石村郁夫 他者のために自分の強みを生かす行動尺度を作成し、その行動の背景要因となる考え、態度を抽出した結果、自分の強みにポジティブな態度を持ち、行動に価値を見出すことによって他者のために強みを生かす行動が促進されることが示された。
32)身近な他者に対する尊敬を高める介入法の開発	共著	平成24年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第14回大会プログラム・発表論文集, 59、東京.	共著：二神佳代、石村郁夫 身近な他者に対して尊敬を高める新たな介入法を開発し、予備的実験を行った結果、身近な他者の長所を再発見し、周囲からの被受容感に気付く効果が得られた。
33)親との死別体験において支えとなる言葉とその適応プロセス	共著	平成24年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第14回大会プログラム・発表論文集, 61、東京.	共著：赤坂好美、石村郁夫 青年期以前に親と死別した10名の協力者に対してどのような情緒的支援が役立ったのか面接調査した結果、その支援によって死別体験における有益性を見い出したり、生き方に対して方向性を見い出したり、することが示された。
34)Birmingham IBS Symptom Questionnaire 日本語版の作成	共著	平成24年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第14回大会プログラム・発表論文集, 63、東京.	共著：浅野憲一、駒沢あさみ、石村郁夫 IBS傾向を測定する十分な信頼性・妥当性を有する Birmingham IBS Symptom Questionnaire を日本語訳し、大学生を対象に調査をした結果、モデルの適合度および内的整合性は十分な値を示しており、IBS傾向者を判別できる測定指標が開発された。
35)肯定的な自己資源育成のためのポジティブ心理学的介入プログラム	共著	平成24年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第14回大会プログラム・発表論文集, 73、東京.	共著：小玉正博、石村郁夫、川崎直樹、小倉泰憲 肯定的心理資源の育成プログラムの簡易版の効果を多施設比較により再確認した結果、全体傾向として肯定的感情の強化と否定的感情の低減が認められた。さらに、心理資源の育成にも効果を示したが、部分的影響に留まった。
36)大学生を対象とした「ほめらレター」ワークの実践報告	共著	平成24年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第14回大会プログラム・発表論文集, 38、東京.	共著：小倉泰憲、松坂暢浩、石村郁夫、小玉正博 ほめられることで自分の強みや持ち味を見つけるワークとして「ほめら

37)愛着スタイルのタイプによる自己への思いやりおよび自己嫌悪感の検討	共著	平成24年9月	日本心理学会第76回大会発表論文集,1031、東京.	レター」を考案し、大学のキャリア教育で実践した結果、約4割の学生が自分の強みを発見・再確認しており、約半数の学生がほめられて「うれしい」と感じていることが示された。 共著：石村郁夫、羽鳥健司、浅野憲一、山口正寛、野村俊明、鋤柄のぞみ 愛着スタイルのタイプによる自己への思いやりと自己嫌悪感の特徴を検討した結果、安定・回避型は自己への思いやりが高く、不安・混乱型は自己嫌悪感が高いことが示された。
38)大学生・大学院生の精神科外来受診動向に関する縦断的研究	共著	平成24年11月	第53回日本児童青年精神医学会総会抄録集,392、東京	共著：石村郁夫、野村俊明、竹下遙、大江悠樹、西松能子 大学生・大学院生の1年間の精神科外来への受診動向を追跡調査した結果、精神症状の改善が見られた約7割の学生は毎週あるいは隔週で薬物療法と心理治療のために来院していることが示された。
39) 自己への思いやりの態度育成が自動思考や心配に及ぼす影響の検討	共著	平成25年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第15回大会プログラム・発表論文集,66、東京.	共著：石村郁夫、羽鳥健司、山口正寛、野村俊明、鋤柄のぞみ 自己への思いやりの態度を育成することで肯定的な自動思考が促進し、より高い目標を設定しようとする認知様式を獲得することが示された。
40) 強みを測定する尺度の開発 (1) —尺度の開発過程と確認的因子分析	共著	平成25年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第15回大会プログラム・発表論文集,71、東京.	共著：風間和、石村郁夫、駒沢あさみ、塩島隆永、二神佳代、赤坂好美、知久昌史、阪無勇士 強みを測定する尺度を開発し、探索的因子分析の結果、6因子が抽出された。本サンプルにおいては、協力、情熱、収集に関する強みが上位であった。
41) 強みを測定する尺度の開発 (2) —各強みのリーダーチャート分析	共著	平成25年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第15回大会プログラム・発表論文集,72、東京.	共著：知久昌史、石村郁夫、駒沢あさみ、二神佳代、赤坂好美、阪無勇士、風間和、塩島隆永 強みに対するイメージを探索的に把握するために、5側面(外向-内向、永続-一時、普遍-限定、動-静、理性-感情)から評定を行った結果、協力が最も好意的に評価されていることが示された。
42) 強みを測定する尺度の開発 (3) —強みの自覚	共著	平成25年7月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第	共著：阪無勇士、石村郁夫、駒沢あさみ、知久昌史、風間和、二神佳代、塩

とうつ・不安症状の関連			15回大会プログラム・発表論文集,78、東京。	島隆永、赤坂好美 強みを自覚していればいるほど大うつ病性障害や不安障害のリスクは低まることが示された。
43) 強み自覚を測定する尺度の開発 (4) —各強みと職業興味の相関分析	共著	平成 25 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 15 回大会プログラム・発表論文集,73、東京。	共著：塩島隆永、石村郁夫、駒沢あさみ、二神佳代、赤坂好美、風間和、知久昌史、阪無勇士 自覚している強みと職業興味の関連により職業を選ぶ際の新たな視点が提供された。
44) 強みを測定する尺度の開発 (5) —キャリア意識の発達との関連	共著	平成 25 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 15 回大会プログラム・発表論文集,67、東京。	共著：赤坂好美、石村郁夫、駒沢あさみ、塩島隆永、二神佳代、知久昌史、阪無勇士、風間和 強みを自覚していればいるほど就職活動に対して積極的に取り組んでいることが示され、円滑な進路決定とキャリア形成にとって強みの自覚は重要であることが示された。
45) 他者に対する尊敬を高める介入法が攻撃性を低減させる効果の検討	共著	平成 25 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 15 回大会プログラム・発表論文集, 53、東京。	共著：二神佳代、石村郁夫 身近な他者への尊敬の念を高める介入を実施した結果、敵意感情が低くなり、被受容感や自尊感情が高まることが示された。
46) 強みの対他者的活用の促進プログラムの開発	共著	平成 25 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 15 回大会プログラム・発表論文集, 68、東京。	共著：駒沢あさみ、石村郁夫 強みを他者のために活用するプログラムを実施し、その効果を検証したところ、強みの理解が深まり、心理的 well-being が高まることが示された。
47) 大学生における勇気行動の種類と勇気行動を発動させる性格の強みの傾	共著	平成 25 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 15 回大会プログラム・発表論文集, 69、東京。	共著：羽鳥健司、石村郁夫 勇気行動を身体的、倫理的、心理的勇気分類し、それぞれ勇気と関連が見られる強みである勇敢さ、継続性、誠実性、活力の特徴を検証した結果、すべての勇気行為には希望、楽観性、自己制御が含まれることが示された。
48) PMS 症状に対して医療機関を利用しない理由についての探索的検討	共著	平成 25 年 7 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 15 回大会プログラム・発表論文集,86、東京。	共著：工藤未妃、石村郁夫、青木佐奈枝 PMS 症状を自覚しているのにも関わらず医療機関を利用しない理由について探索的に検討した結果、軽微な症状で寛容であり、病院・薬物への抵抗感や心理・状況的制約、治療に対する諦め、知識不足、症状の不明瞭さがあることが示された

49)感謝の筆記が小学生の抑うつ低減に及ぼす効果	共著	平成 25 年 9 月	日本健康心理学会第 26 回大会発表論文集, 129.	共著: 羽鳥健司、石村郁夫、北見由奈 感謝の表明のワークを小学生を対象に実施した結果、介入群において悲哀感、無気力、活動性減衰と身体症状が軽減されたことが示された。
50) 自己への思いやりを支える個人特性に関する探索的検討—恥感情、完璧主義, 5 因子性格特性との関連から	共著	平成 25 年 9 月	日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 415、札幌.	共著: 石村郁夫、羽鳥健司、山口正寛、野村俊明、鋤柄のぞみ 自己に対して思いやりを持ってない人の特徴として、失敗やミスに囚われやすく、自分の欠点や欠陥を劣等感に感じ、人間関係で引け目に感じ、神経質で情緒が不安定であることが示された。
51)上司の態度が部下のワーク・エンゲイジメントに及ぼす影響	共著	平成 25 年 9 月	日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 1185、札幌.	共著: 塩島隆永、石村郁夫 女性においては、上司から共感的に話を聴く態度が、男性においては上司の率直な態度（自己一致）が自律性を尊重する態度が従業員のワーク・エンゲイジメントとやうつ症状に影響を及ぼすことが示唆された。
52) ネガティブ感情の受容困難さと反芻および抑うつとの関連	共著	平成 25 年 9 月	日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 918、札幌.	共著: 山口正寛、石村郁夫、鋤柄のぞみ、野村俊明 抑うつに対しては反芻よりもネガティブ感情の受容困難さの影響が強く、反芻の背景にはネガティブ感情の受容困難さが存在していることが推察された。
53) PMS 症状に対する治療希求傾向についての探索的検討	共著	平成 25 年 9 月	日本心理学会第 77 回大会発表論文集, 420、札幌.	共著: 工藤未妃、石村郁夫、青木佐奈枝 PMS 症状の改善に対する動機は高い傾向にあり、特に、PMS 症状が重篤な者ほど高まることが示された。
54) 日常への感謝が肯定的感情と否定的感情に及ぼす効果	共著	平成 26 年 9 月	日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 1EV-2-007、京都.	共著: 羽鳥健司、石村郁夫 普段当たり前と感じていることに感謝するよう介入を施した結果、肯定的感情が増大し、否定的感情が軽減されることが示された。
55) 月経前症候群 (PMS) 重症度別における感情調節機能の特徴	共著	平成 26 年 9 月	日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 2EV-1-055、京都.	共著: 工藤未妃、石村郁夫、青木佐奈枝 PMS 症状が重篤である PMDD 群は感情調節の困難さを感じていることが示され、どの群においても月経前に感情調節が難しくなることが示された。

56) ストレングス・スポッティング尺度邦訳版の信頼性・妥当性の検討	共著	平成26年9月	日本交流分析学会第39回学術大会・日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会プログラム・抄録集, 74、高松.	共著：駒沢あさみ、石村郁夫 ストレングス・スポッティング尺度を邦訳し、その信頼性と妥当性を検証した結果、コミュニケーションスキル、親和動機、対人満足感、楽観性の高さに関連しており、特性不安の低さに関連していることが示された。
57) Compassion Training Programs の概観と今後の展望	共著	平成26年9月	日本交流分析学会第39回学術大会・日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会プログラム・抄録集, 96、高松.	共著：石村郁夫、羽鳥健司、山口正寛、野村俊明、鋤柄のぞみ Compassionを育成する7件のプログラムの特徴を概観した結果、標準的に1セッション2時間で8週間で実施されており、宿題を課すプログラムが多くみられた。
58) 弱みに寛容になる筆記プログラムの効果の検討	共著	平成26年9月	日本交流分析学会第39回学術大会・日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会プログラム・抄録集, 89、高松.	共著：知久昌史、石村郁夫 弱みに寛容になることを主眼とした筆記プログラムの効果を検証した結果、自己受容、自己への思いやりが高まり、恥、失敗によるネガティブな感情、完全性を求める心性、ミスへのとらわれ、抑うつが低減した。
59) 親との死別における悲嘆に転換をもたらす過程	共著	平成26年9月	日本交流分析学会第39回学術大会・日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会プログラム・抄録集, 83、高松.	共著：赤坂好美、石村郁夫 青年期に親と死別した方を対象に喪失体験の過程を語りにより検討した結果、次のステージに進もうという自立の意思の準備と外的環境の変化が伴うことが示され、そのポジティブな変化は継続していることが示された。
60) 感情接近対処に関する心理学的研究の概観	共著	平成26年9月	日本交流分析学会第39回学術大会・日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会プログラム・抄録集, 71、高松.	共著：羽鳥健司、石村郁夫、小玉正博 感情接近対処に関する心理学的研究を概観した結果、感情を意図的に処理し、表出することで、不妊、性犯罪被害、乳がん等の苦悩やストレスを軽減する研究が見られた。
61) 心理・社会的側面からみた慢性疼痛患者の病態とその治療の動向	共著	平成26年9月	日本交流分析学会第39回学術大会・日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第16回大会プログラム・抄録集, 64、高松.	共著：栗原里美、石村郁夫 慢性疼痛に寄与している心理・社会的要因に焦点を当てて概観した結果、不安、ストレス、社会的疎外感により痛みが増悪する報告がみられ、認知行動療法の有効性が指摘され始めていることが示された。
62) 従来の慢性疼痛治療による心理・社会的側面	共著	平成27年9月	日本健康心理学会第28回大会プログラム,	共著：栗原里美、石村郁夫、西川悟、杉浦史郎、豊岡毅

への治療効果に関する検討			P2-48, 東京.	運動療法により身体・運動機能、腰痛を伴う QOL の改善が見られ、同様にそれらの改善には、心理社会的側面の改善が背景に連動していることが推察された。
63) 慢性疼痛患者における家族から情緒的サポートと痛みに対する意味づけとの関連	共著	平成 27 年 9 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 17 回大会プログラム・発表論文集, 25, 東京.	共著: 栗原里美, 石村郁夫 家族からの情緒的サポートがある場合、痛みの経験した自分に他者との距離を感じるといった他者への否定的感情を持つことが示された。
64) 強みの意味形成モデルの検討	共著	平成 27 年 9 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 17 回大会プログラム・発表論文集, 46, 東京.	共著: 駒沢あさみ, 石村郁夫 強みに対する意味づけには、ある程度のパフォーマンスの高さに加え、強みの活用により生じる楽しさや活力を感じる自分が自ららしくあることに重要であることが示された。
65) 思いやり深い愛が形成される夫婦の共通性に関する面接調査	共著	平成 27 年 9 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 17 回大会プログラム・発表論文集, 48, 東京.	共著: 渡辺詩津, 石村郁夫 思いやり深い愛を形成している夫婦の共通性として、結婚初期からお互いの気持ちや考えを伝え合う関係性があり、人生の浮き沈みを共に経験し、結婚に対して後悔していないことが示された。
66) 子どもの強みによる予防的アプローチの検討	共著	平成 28 年 1 月	日本学校メンタルヘルス学会第 19 回大会プログラム・抄録集, 46.	共著: 丸山亮光, 石村郁夫 小学校 5、6 年の児童は強みの自覚によって抑うつ傾向を軽減することが示され、小学校教諭は児童の強みを活用するニーズがあることが示された。
67) 過去のいじめによる心的外傷体験がもたらす認知変容に関する調査	共著	平成 28 年 1 月	日本学校メンタルヘルス学会第 19 回大会プログラム・抄録集, 75.	共著: 寺井治樹, 石村郁夫 いじめ被害経験者の約 39% が PTSD 症状を呈しており、その症状は他者からの支えの他者連帯感により軽減されることが示された。
68) 慢性的な痛み症状への緩和へと至る心理的プロセスの検討	共著	平成 28 年 9 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 17 回大会プログラム・発表論文集, 39, 東京.	共著: 栗原里美, 石村郁夫 慢性的な痛み症状への緩和へと至るプロセスには、我慢して症状を無視して日常をこなそうとすると悪化する要因となり、セルフ・ケアができるようになるために自己受容的な思考が大事であることがわかった。
69) 強みの発展プログラムの開発およびその効果の検討—パフォーマンス	共著	平成 28 年 9 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 17 回大会プログラム・	共著: 駒沢あさみ, 石村郁夫 強みの発見と活用を促進するために、パフォーマンス、活力感、意味付

ス、活力感、意味付けの側面から—			発表論文集, 47、東京.	けの各側面の改善を図ったプログラムと宿題により、参加者の強みへの自覚や活用感が高まり、幸福感が高まることが示された。
70) 一時保護所職員のバーンアウトを予防する児童への態度の検討	共著	平成 28 年 9 月	日本ヒューマン・ケア心理学会学術集会第 17 回大会プログラム・発表論文集, 59、東京.	共著：阪無勇士、石村郁夫 一時保護所職員のバーンアウトを予防する児童への態度には、ポジティブな関わり方や共感的対応をし、自分らしく関わることでバーンアウトが抑制されることが示された。
71) 感謝の表明が感情変化に及ぼす効果—スマートフォンアプリを用いた予備的検討	共著	平成 28 年 11 月	日本健康心理学会第 28 回大会プログラム, P2-09F, 岡山	共著：羽鳥健司、石村郁夫、小玉正博 スマートフォンアプリを用いて、感謝の表明を促したところ、感謝日記と同様に、ポジティブ感情が増加し、ネガティブ感情が軽減されることが示された。
72) 一時保護所職員による入所児童の外在的な問題への効果的な関わり方	共著	平成 28 年 11 月	日本子ども虐待防止学会第 22 回学術集会抄録集, 242	共著：阪無勇士、石村郁夫 一時保護所職員が、児童の問題行動へどのように関わっているかに関して頻度ならびに効果を尋ね、最も効果の高い関わり方は受容・共感的な関わりであることが示された。
(その他、学術雑誌等又は商業誌における解説、総説)				
1) 学会印象記—4th European Conference on Positive Psychology	単著	平成 21 年 3 月	筑波大学臨床心理学論集, 23, 27-28.	第 4 回ヨーロッパポジティブ心理学会議に参加してその所感を述べた。
2) ポジティブ臨床心理学研究会の紹介	単著	平成 22 年 1 月	東京成徳広報, 27, 14	東京成徳学園の広報誌「東京成徳広報」において大学院の取り組みとしてポジティブ臨床心理学研究会の活動報告を行った。
3) 平成 21 年度茨城県臨床心理士会秋期研修会体験報告	単著	平成 22 年 3 月	茨城県臨床心理士会ニューズレター, 29, 2.	平成 21 年度茨城県臨床心理士会秋期研修会に参加してその所感を述べた。
4) 平成 21 年度東京成徳大学ポジティブ臨床心理学研究会活動報告	単著	平成 22 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 10, 145-148.	平成 21 年度の東京成徳大学ポジティブ臨床心理学研究会の活動報告について、研究会報告および活動業績についてまとめた。
5) 平成 22 年度東京成徳大学大学院の研究活動報告	単著	平成 23 年 1 月	東京成徳広報, 29, 14	東京成徳学園の広報誌「東京成徳広報」において日本心理学会優秀論文賞受賞と NHK 出演に関する報告を行った。

6) 平成 22 年度東京成徳大学ポジティブ臨床心理学研究会活動報告	共著	平成 23 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 11,154-157.	平成 22 年度の東京成徳大学ポジティブ臨床心理学研究会の活動報告について、研究会報告および活動業績についてまとめた。
7) 平成 23 年度東京成徳大学ポジティブ臨床心理学研究会活動報告	共著	平成 24 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 12,112-115.	平成 23 年度の東京成徳大学ポジティブ臨床心理学研究会の活動報告について、研究会報告および活動業績についてまとめた。
8)平成 24 年日本ヒューマン・ケア心理学会ニュースレター	単著	平成 25 年 3 月	日本ヒューマン・ケア心理学会ニュースレターNo.14, P.3	2012 年 7 月に筑波大学で開催された日本ヒューマン・ケア心理学会第 14 回大会でポスター発表部門で優秀発表賞を受賞した研究内容の概要を報告した。
9) 平成 24 年度東京成徳大学ポジティブ臨床心理学研究会活動報告	単著	平成 25 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 13,157-158.	平成 24 年度の東京成徳大学ポジティブ臨床心理学研究会の活動報告を行った。
10) 「コンパッション・フォーカスト・セラピー」	単著	平成 29 年 7 月	臨床心理学, 17(4), 46-47.	コンパッション・フォーカスト・セラピーについて歴史、理論、エビデンス等の解説を行った。
11 「Review of Books Abroad」	単著	平成 30 年 4 月	精神療法, 44(2), 152-153.	Deborah Lee (2013) による “The Compassionate-Mind Guide to Recovering from Trauma and PTSD: Using Compassion-Focused Therapy to Overcome Flashbacks, Shame, Guilt, and Fear. New Harbinger.” の文献の紹介を行った。
9) 「随想 コンパッション・フォーカスト・セラピーのトレーニングを受けて」	単著	平成 31 年 2 月	心と社会, 175, 86-92.	英国国立ダービー大学大学院の Postgraduate Certificate in Compassion Focused Therapy のコースを修了した体験について随想をまとめた。